

グラスルーツグローバルイニシアチブ
-草の根・地域からの地球一体化推進-

広田秀樹ゼミナール

08E013 鹿又幸太

09E063 李又輝

10E013 王偉志

10E050 松川貴之

11E042 間野宏樹

目 次

はじめに

1. Study

1. 1 グローバリゼーションの世界的レベルでの恩恵
1. 2 グローバリゼーションを地域の活力にするには？
1. 3 グローバリゼーションに反対する勢力について
1. 4 「グラスルーツグローバリゼーション」の展開

2. Invite

2. 1 アメリカ人 IT コンサルタント デビッド＝ブズロー氏を招待
2. 2 バングラデシュ人留学生エラハム＝ナスラット氏を招待
2. 3 カメルーン人留学生レイナー＝タベタンド氏を招待
2. 4 CLN 代表大出恭子氏を招待
2. 5 フェアトレードショップ「ら・なぷう」オーナー若井由佳子氏を招待

3. Visit

3. 1 長岡まつり前夜祭大民謡流しへの参加
3. 2 外国籍市民の方が経営するお店を訪問
3. 3 外国籍市民の方が集まる教会を訪問
3. 4 外国人研修生の会合を訪問

4. Donate

おわりに

謝辞

グラスルーツグローバル化

-草の根・地域からの地球一体化推進-

はじめに

私たちのゼミでは数年に渡って、「グローバル化と地域」といった視点を中心に活動を進めてきた。

ゼミ生の思考の底流の共通認識として、「近年の時代の最大の特徴は、グローバル化(グローバル化・地球一体化)の急速な進展にある」という時代認識があった。

実際、あらゆるレベルで、グローバル化の影響は絶大である。例えば、世界経済の視点でも、グローバル化の進展は、資本・技術・労働力等の経済発展要因の相互乗り入れを加速させ、世界経済総体を急速に発展させた。例えば、世界 GDP は、グローバル化が本格的に開始された 1989 年の約 2000 兆円から、2012 年の約 7000 兆円と、約 20 年の間に実に約 3 倍に拡大している。世界輸出は、1989 年の約 300 兆円から 2012 年に約 1800 兆円と約 6 倍も拡大している。

人口が圧倒的に多く潜在的成長力があつた中国やインドは、グローバル化が進む中で、1989 年時点では世界経済では全く目立った存在ではなかったが、この 20 年程で、世界中から資本・技術を吸収し経済を爆発的に発展させた。

中国は GDP を拡大させ 2010 年代に世界第 2 位の経済大国にまでなり、2020 年代には現在世界第 1 位のアメリカと並ぶという予測すらある。インドの GDP は現在約 1.8 兆ドルと、イギリス・フランス等の約 2 兆ドルに迫っている。今後もグローバル化は世界経済全体を発展させると考える。

私達の日常生活でも、グローバル化の影響は大きい。例えば、現在私達は、グローバル化のおかげで、食品・服・雑貨を含め、国内の多様な分野の商店で、世界中の商品を容易に買うことができる。さらに、世界中から商品が流入して競争が活発になっているので、それらの商品の値段は全般的に安価になっている。

情報へのコンタクトの面でも、私達は毎日、世界中の情報を、衛星テレビ・インターネット等を通じて、迅速に知ることができるようになっている。

グローバル化は人間の交流も活発にしている。今や世界各地の人が地域に観光・留学・仕事等で訪れ、さらに最近では、外国人の方がお店を出したり会社をつくったりするケースも増えている。どこの地域にあつても、外国の人と接することが多くなり、それは地域の人にとつても、『異文化にふれる機会』となり生活に刺激を与えるものにもなっている。

「海外渡航のチャンスが拡大したことこそグローバル化の最大の恩恵」と考える人も多い。かつては、少数の特権的ポジションを得た人しか、海外渡航はできなかった。しかし、グローバル化のおかげで、現在は「お金と時間さえあれば」誰でも、海外渡航できるようになった。海外渡航は机上の学問や情報・データの分析でも得ることができない、「世界の現実」を把握させ思考・視野を一挙に拡大させ人間的・知的なレベルア

ップをもたらす絶好の学習でもある。

国際政治・国際制度面でも、グローバリゼーションは、国際的な総合調整の必要性から、G20・WTO・IMF・世界銀行等、政治経済的な次元での包括的総合調整を実施する制度・機関等の構築と高度化をもたらし、多数の国民国家の連合形態としてのEU（ヨーロッパ連合）に象徴的なように国民国家を超えた国家連合という統治形態を現出し、地球レベルでの平和的統合の可能性すら、長期的視点から射程に入ってきたという人もいる。

もちろん、グローバリゼーションは多大なメリットを人類や地域にもたらす一方で、その歴史的ランディングの過程で、複数のマイナス面も惹起させてきている。例えば、グローバルレベルでの市場競争経済の現出は、日本の多くの企業にコスト競争を迫る結果となり、多数の人々の賃金の下落傾向の遠因になっている。実際、質素な生活を志向せざるをえないような人が増えている現実もある。

逆に、少数派ではあるが、例えば、グローバルスケールでビジネス等を展開し、過去の時代には考えられなかったような莫大な富を得る人も出ている。「一億総中流」とまで言われた日本のかつての「平等化された社会」から、いわゆる「格差社会」の様相を現出させてきているという面もあり、その中で、かつての日本の人々、特に若者の「上昇志向の意識」が薄れていると語る人もいる。

また、グローバリゼーションによる激しいグローバル競争の中で、地域の企業が倒産するケースも出てきている。最近の、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）などの日本を巻き込む広範囲な国際的自由貿易拡大の潮流にも多様な議論がある。

世界から多数の外国人が到来することを歓迎する人が多くいる一方で、「異文化理解・相互理解が進まない場合に社会的共同生活において摩擦が起きる」とか、「ただでさえ競争社会で精神的に荒廃している状況の中でさらに競争が激しくなりストレスが増大し、犯罪発生が多くなるのではないかなど、いまだ経験していないことからの予測不可能なことゆえに、さまざまな危惧を語る人がいることも事実である。

確かに、これらグローバリゼーションのマイナス面を考えると、グローバリゼーションは、一步対応を誤ると人心や地域を荒廃させる要因にすらなる可能性も内包していることを認識しなければならない。

私たちゼミの基本スタンスは、「グローバリゼーションは不可逆的な人類史における画期的な潮流であり、それをどのように地域の活力として行くか」というところにある。

グローバリゼーションは、複数の課題を乗り越え、やがて平和的にランディングさせる必要があるが、そのためには迂遠なようだが、世界の各地域で、「世界の人々が、出会い対話し交流することこそ必要であり、そのような活動を歴代のゼミ生は、「グラスルーツグローバリゼーション—草の根・地域からの地球一体化推進—」と名付け活動してきた。

実際、世界各地において、「姉妹都市」・「地域間の国際交流活動」など、草の根の国際交際活動は、既に活発になってきている。世界各地での「グラスルーツグローバリゼーション」の拡大こそが、グローバリゼーションを平和的にランディングさせ行く底流となると私たちは確信している。

私たちのゼミでは、「グラスルーツグローバリゼーション」の具体的な方法として、以下の4つを、伝統的手法として確立し、歴代のゼミ生が受け継いできた。

即ち、第1にグローバリゼーションに関する学習(Study)、第2に世界から来られた外

国人の方等をゼミに招待しての対話・交流(Invite)、第3に外国人の方が集まる場所等への訪問(Visit)、第4に悠久祭(学園祭)に出店しその利益をユニセフに寄附(Donate)である。

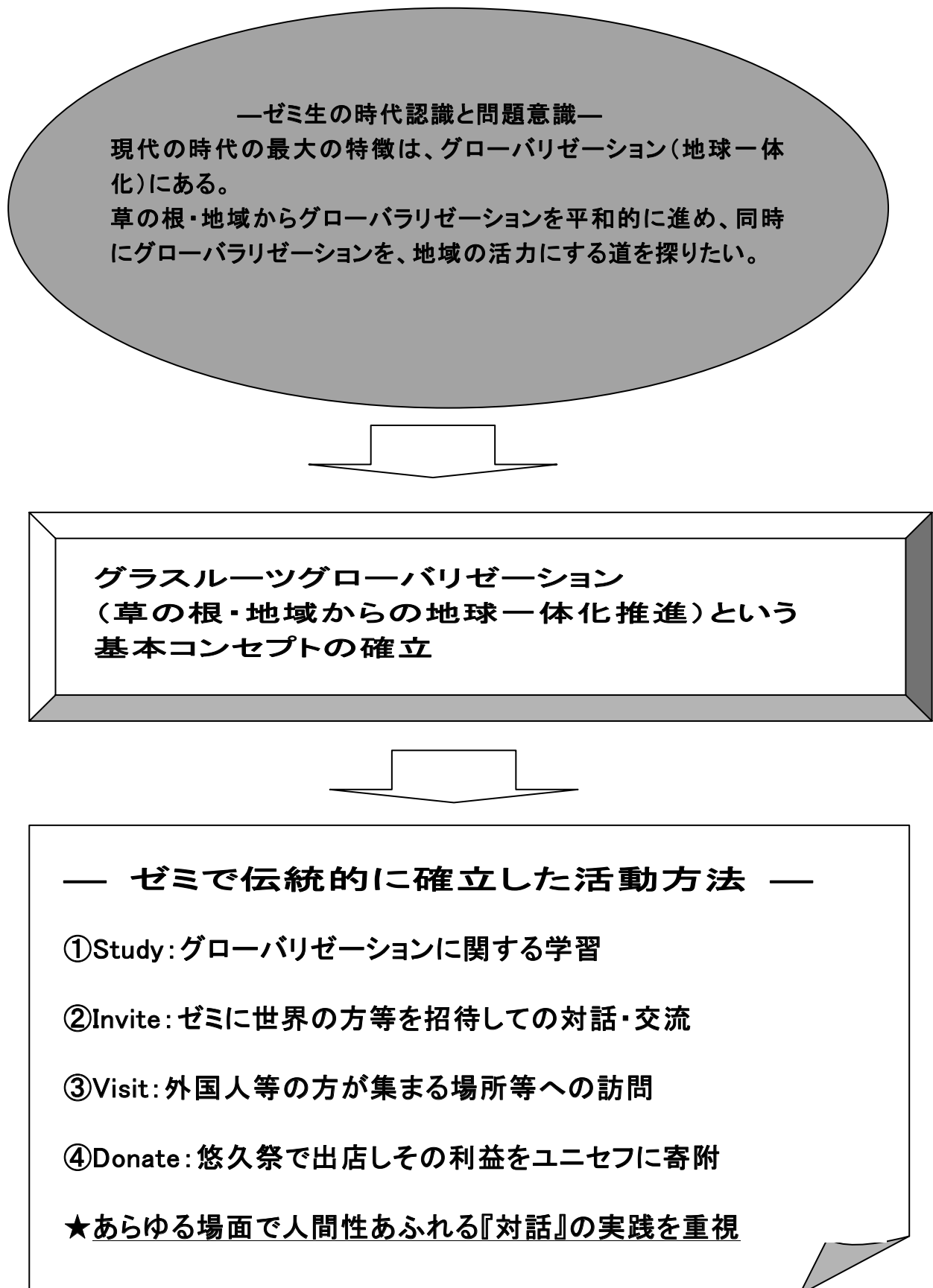
—対話の重視—

「グラスルーツグローバルゼーション」の活動を進める上で最も重視してきたことは、『対話』・『徹底した対話』である。古代ギリシアのソクラテスは、『対話』によって真実を明らかにし、『対話』によって人間や社会を変革しようと挑戦した。インドのマハトマ＝ガンジーも『対話』によって一人一人の人間の内奥を変えそれを社会変革の運動へと広げていった。「グラスルーツグローバルゼーション」の活動においては、ゼミ生同士、ゼミ生と外国人等外部の方、訪問した現場での多くの方々とゼミ生、全ての場面において、人間性豊かなレベルの高い『対話』の実践を心がけ、お互いの考え・主張・それらの背景を探り理解し、共通認識やあるべき結論等を明らかにして行きたいと考え活動を進めてきた。

お互いの考え・主張をその背景まで含め理解しながら、よく聞き考えるという、『ソクラテス的対話』こそ、ゼミの活動の基幹にすえた手法であり、『対話』を活動の基底に置くことがゼミの伝統になってきた。

本レポートの大半部分も、対話を整理した形でまとめた。以下、今年度一年間の活動を報告したい。なお、実際の対話の一言半句を整理・編集する作業は、趣旨を明確にする点を考えると、非常に困難な作業であった。本文中のゼミ長は王、副ゼミ長は松川で、残りの学生は便宜上学生A・B・Cとして、対話の内容の趣旨が明確になるように努力した。

図 1：ゼミ生の時代認識・問題意識とグラスルーツグローバル化



グローバリゼーションとは何か

グローバリゼーションとは？

Globalization（地球一体化）



あらゆる点で、世界的交流が盛んになり、世界全体が一体化していくこと。

1. Study

私達は最初に、グローバリゼーションについて徹底して学習した。本年度は、「グローバリゼーションの世界的レベルでの恩恵」・「グローバリゼーションを地域の活力にするには？」・「グローバリゼーションに反対する勢力について」・「グラスルーツグローバリゼーションの展開」という4つのメインテーマを決め、皆で資料を持ち寄り、対話・ブレインストーミング形式でディスカッションを行った。

1.1 グローバリゼーションの世界的レベルでの恩恵

ゼミ長：ゼミでは、歴代の先輩によって、「グローバリゼーションと地域の関係」を中心に、活動を行ってきました。グローバリゼーションの基本知識と、その世界レベルの恩恵をテーマに、フランクな議論をしたいと思う。まず、歴代の先輩から受け継いできた基本認識を確認しよう。グローバリゼーションとは、英語では「Globalization」、日本語では「地球一体化・グローバル化」、中国語では「全球化」と言われている。グローバリゼーションを定義すると、「経済、情報、政治、文化、人々の意識など、あらゆる点で世界的交流が盛んになり、世界全体が一体化し行く、人類史における画期的な歴史的潮流」ということになる。そして、グローバリゼーションは不可逆的な潮流で、今後も急速に高度化すると予想される。私たちは、グローバリゼーションは、ストップをかけるものではなく、有効な対応をしながら、効果的に受け入れ、逆に、それをうまく地域の活力にすべきものであると考える。

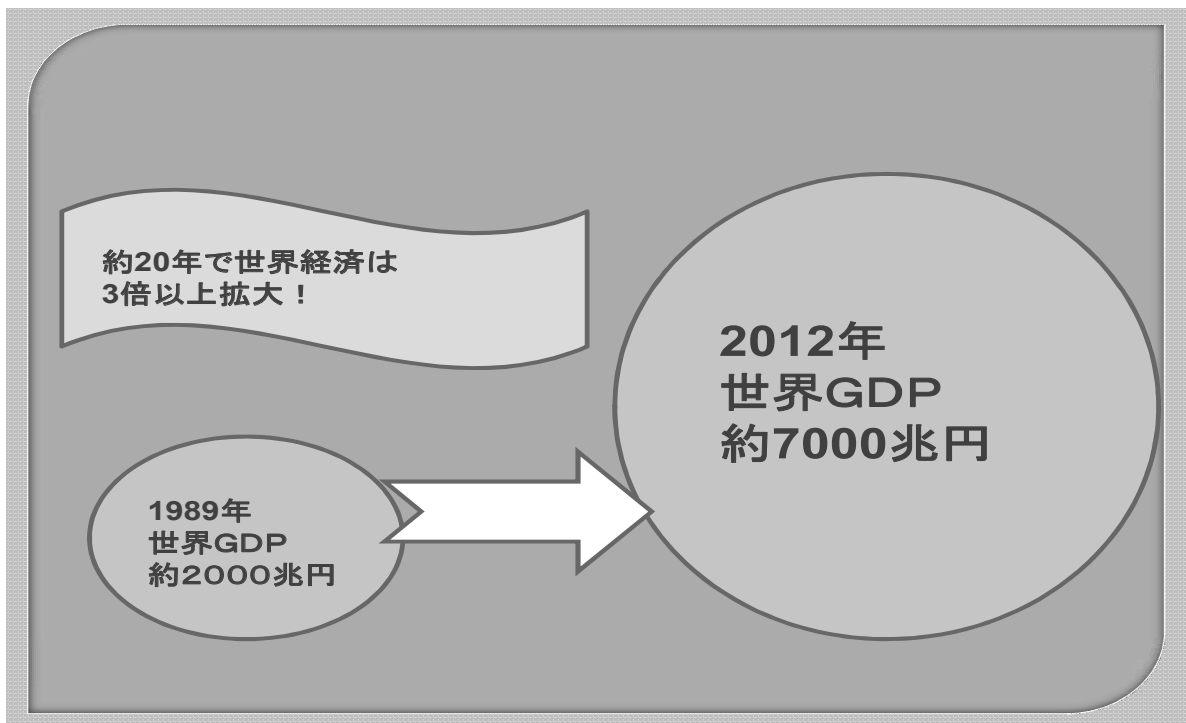
副ゼミ長：グローバリゼーションの恩恵を世界的視点で整理して考えてみよう。グローバ

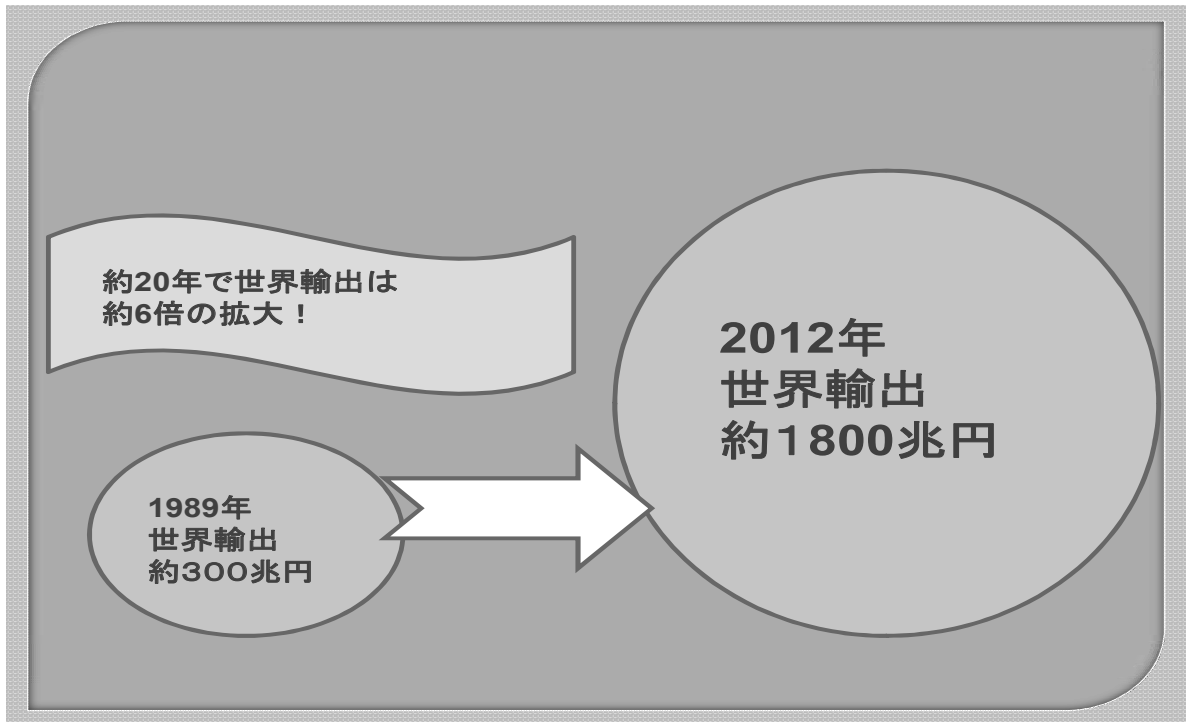
リゼーションは、世界経済のマクロ的視点からすれば、圧倒的な恩恵をもたらすことになってきたと思う。例えば、1989年約2000兆円だった世界GDPが、グローバリゼーションが本格化する1990年代以降爆発的に拡大し2012年約7000兆円と、たった20年間程で世界GDPが3倍程に拡大した。世界輸出は1989年約300兆円から2012年約1800兆円と5倍程に拡大した。世界レベルで、グローバリゼーションは、経済を拡大すること、富を増やして行くことに成功してきたと言える。この恩恵を一番受けた国は、中国・インド・東南アジア・アフリカ等の発展途上国で、世界中から資本・技術・スキル・ノウハウを導入し、それを梃子に、経済発展に成功し、急速に国民経済を豊かにしている。グローバリゼーションは、FTAやEPAに象徴的なように、世界レベルで自由貿易を拡大し、世界中の人々の日常生活に、世界中の商品を届け、しかも全般的にそれらの価格下落、低価格化にも成功した。インターネットや衛星テレビの発展・普及によって、世界の人々が、世界中の情報を容易に迅速にコンタクトすることも実現してきた。さらに、ジェット旅客機の開発・高度化・世界的普及、世界的な航空会社間競争の活発化、出入国管理の効率化・簡素化・迅速化等が、海外渡航の拡大を実現し、世界中の人々が直接出会う機会が増大した。総じて、グローバリゼーションの恩恵は巨大であり、このような恩恵を考えても、グローバリゼーションは、有効な調整政策で対応しながら、世界中で受け入れていくべきと考える。

学生A： そうだね。また、想像を絶する少子高齢化・人口減少によって活力がダウンする地域にとって、グローバリゼーションを活力として利用する道を探っていくことが大切だ。

ゼミ長： ここで、グローバリゼーションのカテゴリー・次元を整理しよう。つまり、グローバリゼーションと言っても、ここまで発展・高度化してくると、いろいろなカテゴリー・次元が出てくるということだ。グローバリゼーションの主なカテゴリー・次元については、以下のように整理できる。即ち、第1に、エコノミック・グローバリゼーション（経済的地球一体化）。輸出入・直接投資・雇用等の次元での、経済的地球一体化である。世界レベルで、ありとあらゆる商品が世界中で売買され、証券・公債・土地・建物への投資もボーダーを越えて展開されている。ワーキングホリデーやファームステイで世界中に働きに出る若者も増えてきたし、ニューヨークやロンドン・シドニーの仕事(job)の情報も、世界中からアクセスできて、人を世界中から雇用したり、世界中で仕事を探したりする人も出てきている。現在話題になっているTPPもエコノミック・グローバリゼーションの中で、起きている現象だね。第2に、インフォメーションリレイティド・グローバリゼーション（情報関係の地球一体化）。インターネットや衛星放送、また最近のFace bookなどに象徴的なように、世界的レベルでの情報交流や情報共有が、インフォメーションリレイティド・グローバリゼーションである。第3に、カルチャラル・グローバリゼーションがある。世界中の人が、世界中の多様な文化、ファッション、アート、音楽などの文化とコンタクトをとり、お互いに刺激を得るようになってきているのが、カルチャラル・グ

ローバリゼーションだ。第4に、ダイレクト・エンカウンター・グローバリゼーション。世界中の人がボーダーを越え、直接交流して行くことが、ダイレクト・エンカウンター・グローバリゼーションだ。この積み重ねはやがて、人々の意識を、「国民意識」から「世界市民意識」にシフトさせることになるんじゃないかな。日本のマスコミなんかでも『セカイ人』みたいな言葉が出てきているよ。第5に、ポリティカル・グローバリゼーション（政治的地球一体化）。G20・WTO・EU・世界銀行・IMFの諸活動のような世界一体的な政治がポリティカル・グローバリゼーションである。2008年のリーマンショックを端緒とした世界同時の金融危機・同時不況の深刻化においても、G20による国際経済政策調整が効果を発揮し、1930年代・1940年代初頭のような破滅的な国際政治危機には至らなかったのは、ポリティカル・グローバリゼーションのおかげだ。





グローバル化によって

- 1) 世界中の商品が入手可能に。
- 2) 世界中への海外渡航が可能に。
- 3) 世界中の情報が迅速に入手可能に。
- 4) 世界中の人と交流が可能に。
- 5) 世界中の市場でビジネスが可能に。
- 6) 世界中で働くことも可能に。
- 7) 世界中に移住することも可能に。

表 1：グローバリゼーションの多様な次元

<p>グローバリゼーション</p>	<p>エコノミック・グローバリゼーション (経済的地球一体化)</p>	<p>世界中の商品、資本、店、会社、工場、労働力等の経済要因の相互乗り入れ。 これら経済要因を効果的に呼び込むことに成功している国・地域は発展している。 グローバリゼーションを地域の活力にする戦略のポイントもここにある。</p>
	<p>インフォメーションリレイティド・グローバリゼーション (情報関係の地球一体化)</p>	<p>世界中の出来事等に関する情報が衛星テレビ、インターネット等を通じて、迅速に伝わり、世界中の人が同時に共通の情報を得ることが可能になっている情報面での地球一体化。</p>
	<p>カルチャラル・グローバリゼーション</p>	<p>世界中の人が、世界中の多様な芸術・ファッション、アート、音楽などの文化とコンタクトをとり、刺激し合うようになる文化的な地球一体化。</p>
	<p>ダイレクト・エンカウンター・グローバリゼーション</p>	<p>世界中の人々がボーダーを越え、直接交流し対話するようになるのが、ダイレクト・エンカウンター・グローバリゼーションで、この蓄積はやがて現在の「国民意識」の限界を突破させ、多くに人間の思考パラダイムを「世界市民意識」に高めることになる。</p>
	<p>ポリティカル・グローバリゼーション (政治的地球一体化)</p>	<p>1600年代の「ウェストファリア条約」以来の国民国家を国際政治の基本単位とする世界政治の状態から、G20を舞台とした多数の国家間での活発な政策調整等による世界政治の共同運営のような現象がポリティカル・グローバリゼーションである。 複数の国民国家が連合して「国家連合」を形成して行く潮流も生まれた。即ち、ヨーロッパの多数の国民国家はEUという「国家連合」を形成し、EU大統領という国家連合の共通の指導者を選出するまでになっている。</p>

学生B：なるほど、このようなグローバリゼーションの分類を考えると、もっとたくさんあるような気がするよ。

副ゼミ長：確かに、日本の国技の相撲だって、モンゴル・アメリカ・エストニア・アフリ

かなんかから、力士になる人がいる。野球選手やサッカー選手は、日本と世界のチームを、行ったり来たりでしょう。これは、スポーツリレイティド・グローバル化と呼べる。

学生C： 製品開発の分野でも、グローバル化は進展している。アメリカなんか、戦略的な最新のコンピュータ機器を開発する場合、本体的頭脳的な部分は、アメリカの技術を使い、周辺機器部分は、アジアや他国のコストの安く生産される部品・製品を使うことが多い。洋服なんかも、デザインはヨーロッパや日本で行って、生産は東南アジアや中米でなんてことが起きている。マニュファクチャリングリレイティド・グローバル化と言える。

学生A： 個人的には、グローバル化には、大きな恩恵を受けてきたと思う。音楽や映画なんかの外国製品を安く買えるようになってるし、何とんでも、海外渡航が容易になっているのは、ありがたい。長岡大学に入学してから、中国・アメリカ・韓国・フランスに行けた。とっても刺激になり視野が広がり、勉強になった。自分自身の人間的レベルが上がって行くのが、実感した。ちゃんと背景や歴史を勉強して、見る目、分析する頭脳を持って海外渡航すれば、それは、高度な学習になるし、自分のレベルアップになることが分かった。億単位の価値がある。世界には200もの国家があり。これからも、一生涯かけて、どんどん渡航したい。人生の目標ができた。このことが大学時代最大の成果だ。

副ゼミ長： うーん。ずいぶん感動したんだね。確かに、海外渡航が容易になったのは、グローバル化の最大の恩恵の一つだね。例えば、日本だって、1960年代・70年代くらいまでは、本当に海外渡航はまれだった。ちなみに、成田国際空港のスタートが、1978年だからね。1960年代・70年代までは、海外に行ける人は、極端に言えば、男性だったら、外交官か商社マン、女性だったら、昔で言うスチワーデスくらいで、だから若者の憧れの人気職業は、外交官・商社マン・スチワーデスだったて聞くよ。

ゼミ長： 今は、ちょっとお金と時間をつくれれば誰でも海外渡航できる。いい時代だ。現実に海外渡航でどんなことを学びましたか？

学生A： 大きなインパクトがあって勉強になった。どんなに、日本で、机上で資料やデータで勉強しても、現地に行ってみないと分からないことが、たくさんあるんだ。例えば、アメリカのニューヨークに行った時なんだけど、色々調べて勉強して知識も蓄積したつもりだったけど、行って初めて知る・習うことは、極めて多い。

ゼミ長： 例えば？

学生A： ニューヨークって、アッパーウエストサイドとアッパーイーストサイドがあるんだけど、どちらからかと言うと、アッパーイーストサイドの方が、高級なマンションが多く、 prestigeが高いなんてことを、はじめて知った。実際、イーストの方に行ってみると、閑静な高級住宅街で、店も高級だった。そこから、北へずっと行くと、サウスブロンクスっていうエリアなんだけど、いい人もたくさんいて、いろいろ話したけど、雰囲気はアッパーと比較すると、かなり質素で、そこに行ったらアメリカの格差社会を、思い知らされた。ウォールストリ

ートでヒアリングした時なんかも、向こうの証券マンなんかが、結構聞いてくる。日本の企業の景気はどうだとか。技術は商品はとか。どこの土地が人気が出ているとか。つまり、「価格が上昇する」ものへの情報がほしいわけだ。投資での成功意欲。その背景としての情報への意欲みたいなものに驚嘆した。

アメリカ人の発想の基底部は、『貯蓄より使う・投資してレベルアップ』という思考回路なんだと思った。ボストンで、耳にして驚いたのは、ここは「シビライズドされたエリア」とかいう言葉だった。直訳すると「文明化された地域」なんだけど、よく聞いてみると、充実した教育・人材育成・効果的な福祉の機能で、人間・住民全体のレベルを上げ、ホームレスみたいな人は出さないという、誇りの意味で言っていた。確かに、ボストンで会った人は、礼儀正しく、親切で、人間的にレベルが高いと、分かった。アメリカで一番歴史があるエリアだからね。フランスにも行ったけど、日本ではよく「欧米」とか言って同じようにみるけど、かなりアメリカとヨーロッパは違うと実感した。

副ゼミ長：アメリカとヨーロッパ。どんな違いが分かったんだ？

学生A：アメリカは、「自由の国」とか言うでしょ。リバティーが日本語の「自由」と訳され、日本人の若者は、「自由」とか言うのと、「自分の好きなように行動すること」くらいのイメージでしょう。でも、アメリカに行って、現地の人と話して交流して、「自由」って言う意味が分かった。「他人の迷惑にならない限り自分の意志で何をやってもよいし、その行為・活動の拡大こそが地域・国家を発展させる原動力」というニュアンスがあるんだ。ライフスタイルも、極めて、自由な生き方をする人が多い。だから、不必要な規制・法・課税自体を極端に嫌うのがアメリカ人なんだ。独裁や全体主義なんかは、自由を圧殺する社会体制だから一番反対するし、その対抗制度、自由を守る統治制度として「自由主義・民主主義」を重視するっていう発想になるんだ。政府自体が膨張すれば自由を圧殺するから「小さな政府」の志向もでてくる。個人レベルでは、自由に生きるには、強くなければならないから、独立心とか自助努力の大切さが、教えられる。

副ゼミ長：それで、ヨーロッパ・フランスはどうだというんだ？

学生A：個人レベルでは、フランス人はアメリカ人と同じくらい「自由」を重視する。個人を束縛するあらゆるものを拒絶する傾向があるのには驚く。それと「個性」。フランス人は、できるだけ他人との違いが出るような洋服、行動、生き方をしようとする。つまり、自由は個性を強めるベースみたいな考えもあるのがフランスなんだと思った。政治のレベルでもフランスはアメリカと違う。いわゆる「社会民主主義」で、リベラルな思想とか言ってるが、市場の自由競争は基本でいいが、アメリカみたいな小さな政府で、自助努力で生きろみたいじゃなくて、政府は福祉なんかは責任をもってくれと考える人が多いんだ。それと、国際政治的な発想では、フランス人の方が、平和主義というか国際協調主義的な考えの人が多く印象だった。宗教心については、アメリカもフランスも強い人が多いと感じた。特に、アメリカに行って、宗教のウェイトが大きいことには驚嘆した。大都市のビジネスパーソンなんかでも、皆、信仰心があつく、教会

に行って祈っている。宗教は人間を根本的に律する根本的に必須のもの、一流人の条件といった考えがある。ニューヨークのウォールストリートにも教会があり祈っている人がいた。特に、ベトナム戦争以降、アメリカでは、伝統的な宗教的要素が見直され、いわゆるコンサーバティブなエリアを中心に、政治的にも力を拡大し、キリスト教の保守派のグループなんかは力をつけ、1980年代以降は、明確に、共和党政権の支柱的支持層にまでなって発展した。

ゼミ長： ずいぶん視野を広げたんだね。

学生A： 自分でもそう思う。まさに海外渡航の拡大・容易さの実現というグローバル化の恩恵を、自分は受けていると実感している。この点だけ考えても、個人的にはグローバル化は賛成で、もっともっと進んでほしいと思う。
<笑い>

1. 2 グローバリゼーションを地域の活力にするには？

ゼミ長： グローバリゼーションは、ますます多様な次元で進むと思う。グローバル化を念頭に、世界的なスケールで考えれば、何か希望が湧いてくるよね。今日は、グローバル化を、地域の活力にどう利用するかという視点で、ディスカッションしよう。とにかく日本の地域は大変なことになって行くようだ。政府の政策や方針等においても、「地域の再生」・「地域の活力」という、視点が重視されてきているように思う。

学生C： 何で地域が大変なんだろうか？

ゼミ長： その背景としては、何が考えられると思う？

学生B： 一つは少子高齢化による人口ピラミッドが逆三角形になって行くことじゃないか。人口問題については、トップレベルで実権を握ってリーダーシップを執っている人達の認識は、甘すぎるんじゃないか。日本の人口構成・地域の人口構成はどんどん高齢化している。地域にあつては、既に、人口の25%を高齢者が占めている所も多い。今後急速にもっと高齢化する。2015年に団塊の世代が全て高齢者入りして以降は、地域の高齢者比率が30%を超える所も出るんじゃないか。つまり、3人に一人が高齢者という地域だ。

副ゼミ長： ずいぶん深刻な思いのようだね。高齢者が増えるっていうけど、それって皆長生きするわけでしょう。別に悪いことじゃないよね。<笑い>

ゼミ長： そうなんだ。医療・年金や福祉制度の高度化が、高齢者を長生きさせ幸福にしている。その面はいいよ。

学生B： 高齢者の人は、安定した年金生活を送れば、幸福でしょう。問題は年金保険料なんかを払う現役世代だ。20代・30代・40代・50代のいわゆる現役世代だ。正社員の給料から、どれだけ、保険料・税金が徴収されるか知ってますか？ 約25%です。20万円の給料から、5万円だよ。今後、もっと徴収額が拡大される。20万から、6万・7万・8万円ってね。現役世代の「使えるお金」がどんどん減って行くわけだよ。

学生A： 人口問題は単純に考えたらいいよ。若い人が増えなきゃ、地域に活力は出ない

よ。何ていっても若者の潜在的エネルギー・パワー・発想力・行動力・活力は、いつの時代も、すごいはずだよ。今は、少子化っていうのは地域で、若者の数がどんどん減るわけでしょう。これじゃ、活力でないさ。どんなに高齢者が増えても、それは皆、今まで社会を支えてくれたわけで、敬意を表するし、長い間、年金保険料払ってきた。だから、一定の必要十分な年金もらって、安心して生活してほしい。その権利がある。問題は、やはり、若者、現役世代の数だよ。例えば、インドは年間約 2000 万人生まれるわけでしょう。幼少から生存競争すごくなる。だから全体のレベルが上がり地域・国家の活力が増す。

学生 C : 政府は少子化対策とかここ 20 年程トライしているが全く効果がない。経済的理由が少子化の原因だとかいうが、どうなんだろう？

学生 A : 違うと思うよ。昔なんかは、もっと貧乏でも早く結婚して子供がたくさん生まれてたわけでしょう。今は、ほかに楽しいことがたくさんあるし、自由に生きられるもん。自分がチャレンジしたいことがやれる、手に入れたいものがあれば、働いて何でも手に入れる。世界中へちょっと働いて時間をつくれればどこでも海外旅行だ。こんなうまくやれば、自由なワクワクする人生ができる。束縛される選択肢なんか取りたくないのさ。

学生 C : だったら、結婚する人は増えないし、少子化は続くよ。

学生 A : そうさ。だから、世界から移民を入れるしかないよ。絶対にね。フィンランドやスウェーデンなんかの北欧をみたら分かるよ。子育てに全く困らないし福祉が完璧なのに、出生数はそれほど増えない。だから移民を入れている。子育て対策だとかやっても増えないことを証明しているよ。

ゼミ長 : 日本はアジアの人なんかにしてみれば近いし、「憧れの土地」なんだ。日本に入ってきて長期や永住じゃないにしても、働きたいなんていう人は、ものすごく多いよ。だったら、もっとうまく、入国してもらったらよいし、働く人が増えれば、現役世代の人口は維持でき増えるわけでしょう。外国から来て働く人だって、当然、消費税・直接税・住民税だって払ってくれるわけでしょう。財政や労働力の面から言えば、プラスにきまってるんだ。外国の人が地域で働いて、いくらか母国に送金する。母国の人だって幸福になる。みんな、ハッピーじゃないか。

学生 A : 私は、ボストン・ニューヨークに行ったけどね。移民制度については、アメリカを見習ってほしい。アメリカは移民の国だという点を誇りにしている。建国当初は人口は約 400 万人。移民をどんどん受け入れ活力にして世界的国家になったんだ。今でも年間 70 万人近くの移民を入れている。アメリカは、大きく言えば、世界から人間を入れる移民は、2段階システムになっている。即ち、『長期に住んで働いてもよいという永住権 (グリーンカード)』と、『完全なアメリカ人になってくれるという市民権』の、2 つなんだ。『永住権 (グリーンカード)』と『市民権』の違いは、『永住権』は参政権がないが、『市民権』は参政権があるということだ。『グリーンカード』は、中国でもどんどん活用しているって聞くよ。

ゼミ長 : そうなんだ。日本の制度ももっと世界から人が入って働くようなものにしない

とね。中国の「グリーンカード」制度の状況を紹介したい。中国のグリーンカード制度は2004年8月に正式にスタートした。制度設立の目的は、外国籍のハイレベル人材による中国での投資・経営やハイテク関連・文化事業への従事を誘致するほか、中国に永住したいという一部外国人の切実な願いを叶えるためである。グリーンカードを取得した外国人は、中国に無期限で居留する資格を持ち、中国の出入国に際しビザを取得する必要がなくパスポートと「グリーンカード」だけで出入国手続きが可能である。現在の法律では以下7つの条件のいずれかを満たせば永住申請を行うことができる。①中国で直接投資を行い、投資状況が3年間続けて安定しておりきちんと納税を行っていること。対中投資における実質的な登録資本金が投資対象産業が国家の公布している「外商投資産業指導目録」の奨励類産業への投資が計50万ドルを超えること。中国西部地域および国家貧困扶助・開発工作重点県への投資が計50万ドルを超えること。中国中部地域への投資が計100万ドルを超えること。中国への投資が計200万ドルを超えることのいずれかの条件を満たすこと。②中国で副総経理・副工場長以上もしくは副教授・副研究員など副高級職以上の役職に就いているまたはそれと同等の待遇を受けており4年以上継続してその業務に就いていること。4年以上の継続した勤務期間のうち中国で累計3年以上納税していること。③中国に対し卓越した貢献をしたかまたは国から特別に必要とされていること。④1-3項目に当てはまる者の配偶者および18歳未満の未婚の子供。⑤中国国民あるいは中国の永住権を所持する外国人を配偶者とし婚姻期間5年を上回りすでに中国に5年以上居住実績があり毎年9カ月以上中国に滞在しかつ安定した生活保障と定住所があること。⑥18歳未満の未婚の子供で、両親に生計を依存していること。⑦国外に直系親族がおらず中国国内の直系親族と暮らし年齢が60歳以上で中国で連続5年以上居住しており毎年9カ月以上中国に滞在しかつ安定した生活保障と定住所があること。

学生C： つまり中国も人口戦略上どんどん海外から人間を入れるようになってきているってことだね。アメリカと似てきているね。『人は力だ』優れた人を入れて、その人が活躍するように応援できるようにするのが、地域の活力になるような気がするね。

学生A： グローバリゼーション以前は、資本・情報・技術・人間はその国の中だけで調達が基本だった。しかし、グローバリゼーション以降は、資本・情報・技術・人間といったものは、世界中から、引っ張れるってことなんだ。この一点を、地域の活力にどう連動させるかってことだね。

ゼミ長： 大きなテーマです。今後もじっくり考えて行きましょう。

1. 3 グローバリゼーションに反対する勢力について

ゼミ長： グローバリゼーションを考える場合、今までのような肯定的な視点とは別な視点も重要だ。グローバリゼーションに、反対するというか、否定的な意見を持つ人もたくさんいるのが現実だ。

副ゼミ長：グローバリゼーションに反対する人とはどんな人達だ？

学生C： グローバルな激しい競争にさらされるグループや人達だよ。例えば、国内・地域の製造業・食品業界の中には、世界の日本人より安価な労働力を背景に安い商品をつくる国の企業に、近年おされて大変だよ。

学生B： 地域の製造業の中には、自社の技術力を上げて質的なレベルで競争力を上げて対応したり、あるいは、自社の工場自体を、労働力が安価なアジア諸国なんかの海外にシフトしたりして、生き残っているグループもある。総じて、製造業については、グローバリゼーションの影響は回避できないと考え、それを受け入れ、多様な対応で企業努力を展開しているようだ。

副ゼミ長：サービス業のグローバリゼーション対応も進んでいる。地域のホテルなんかは、日本以外の顧客の集客に力を入れている所も増えている。観光地なんかで、英語・韓国語・中国語の表示も増えてるし、外国語の会話の学習をする従業員も多い。

ゼミ長： 旅行会社なんかも、海外の営業拠点を強化している。上海や香港、バンコクなんかで日本と同じように営業活動をし始めている。

学生B： 民間企業はやはり力強いね。恒常的に、勝ち残るために迅速に変化して、闘ってる。民間企業の活力・活動・闘いが利益を生むんだね。資本主義のダイナミズムだ。日本は今後も、どうやって民間・民間企業が活力を出すかにかかってくる。民間にパワーが出て、そこから税金が増えて、政策も展開できるんだ。

学生C： 地域の農業とグローバリゼーションの関係はどう思う？

学生B： 難しい課題かもしれない。農産物が完全に自由貿易になれば、地域の農産物は、海外の安価な農産物とダイレクトに競争することになる。農業の場合、国家戦略的な食糧自給率の視点もある。健康面への配慮の視点もある。

学生C： 「地産地消」は、地域の農業を守る一つの手法だ。

副ゼミ長：国家安全保障上慎重に考えないといけない分野としては、農業・食糧以外にも、軍事関係・エネルギー・教育なんかが同じで、外国の供給・提供に安易にゆだねられない分野と考える面もある。

ゼミ長： グローバリゼーションと従来の自国産業の調整の問題、国家安全保障との調整の問題は、大きな課題で、グローバリゼーションとは、大局的には大きな希望をもたせる歴史的トレンドなんだが、反面、複雑な国内・地域の「現実」との、効果的な調整を必要とすることも事実なんだ。ゼミではその点もよく考えて学習し活動に取り組んで行こう。

1. 4 「グラスルーツグローバリゼーション」の展開

ゼミ長： 1990年代以降のグローバリゼーションの発展は、人類に恩恵を与える反面、深刻な問題を引き起こすことにもなっていることを、見逃してはならないと考える。

学生A： 最も深刻なことは、グローバリゼーションの急速な展開と同時に、世界各地でおそらく主な原因としては相互理解の欠如から、地域紛争、動乱、戦争、宗教

間対立、民族間対立、経済摩擦、経済格差などの、摩擦が多発している。

グローバリゼーションは、一步間違えると、大規模戦争を起こす遠因にもなりかねないことが分かってきた。

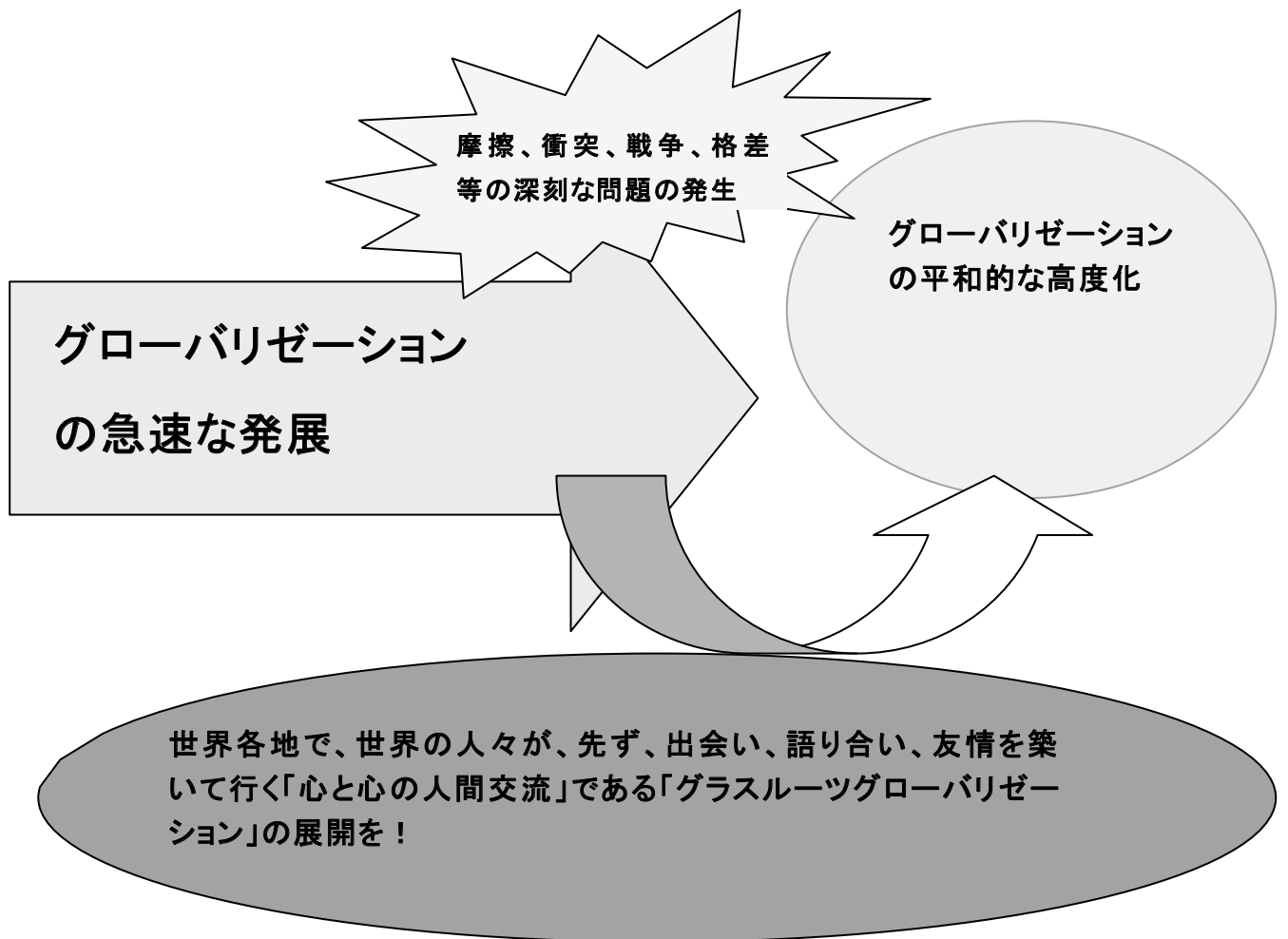
学生 B : 世界の全ての人間には尊い尊厳があり全員に使命がある。また、家族があり、友人がいる。世界の人々は、摩擦・紛争・衝突・戦争等、絶対に望んでいない。「世界の人々が、グローバリゼーションの中で、平和に人生を送るようにするには、どうしたらよいか」を真剣に考えるべきだ。

ゼミ長 : 世界の人々が、グローバリゼーションの中で、平和に生きることができるようにするには、根本的には、迂遠なように思えるが、先ず、世界の人々が、世界各地で、出会い、語り合い、友情を築いていくことが、最も重要であり、世界各地における、草の根の、グラスルーツの、国際交流、人間交流、人間対話を、拡大していくことが、長期的には、グローバリゼーションを平和的にランディングさせていく、底流になると考えます。

副ゼミ長 : 世界各地での、草の根の人間交流・国際交流としての、「グラスルーツグローバリゼーション」こそ、グローバリゼーションの諸問題を乗り越えさせ、グローバリゼーションを平和的に高度化する上での、最重要な底流をなすものになるんだね。実は、「草の根の国際交流」だけど、現実に、各地でどんどん、進んできている。日本の大半の地域が、世界の地域と姉妹都市関係等を結んで、市民間で活発に交流している。例えば、長岡市はアメリカのフォートワース市や、ハワイのホノルル市と姉妹都市関係にある。見附市もベトナムのダナン市と交流しているようだ。南魚沼市はノルウェーのリレハンメル市と交流している。草の根の国際交流で、世界中の人間が交流するのは、素晴らしい。人間は、とにかく会って話すことが大切だ。そして、人間関係では、本気に交流をしようというのなら、全てこちらからの姿勢が重要だね。相手側に何か求めるんじゃないでなくて、こちらから、何回も誠意を示して、アプローチすることじゃないかな。

ゼミ長 : 現在は、世界レベルでインターネットも航空ネットワークも発達している。つまり、個人レベル・地域レベル・民間レベルの国際交流、グラスルーツなグローバリゼーションの推進が活発にできる環境にある。グラスルーツグローバリゼーションの活動の積み重ねこそが、グローバル化を平和的に高度化する底流になることは間違いない。ゼミでも、6期生・7期生・8期生・9期生・10期生・11期生と、草の根国際交流をテーマにした活動が先輩から後輩へと、受け継がれてきた。ささやかなアクティビティだが、大きな歴史的潮流に乗った活動で歴史的意義は大きいと思う。今後も、伝統的手法に沿って、Invite・Visit・Donateの活動を進めて行こう。

図 2：グローバル化の発展・諸問題とグラスルーツグローバル化の重要性



各地域で国際交流・人間交流は活発化している！

①長岡市
アメリカのフォートワース市・ホノルル市等と姉妹都市関係にあり交流。

②見附市
ベトナムのダナン市の方と交流。

③小千谷市
多くの市民の方がアメリカのオレゴン市の方と交流。

④南魚沼市
ノルウェーのリレハンメル市と姉妹都市関係にあり交流。

★新潟県・全国・世界の多くの地域は既に、独自の国際交流・人間交流を進めている。

2. Invite

グラスルーツグローバル化の活動として、ゼミに世界から地域にやってきた外国人の方や国際交流で活躍する方を招待し対話・交流し、さまざまなことを学んだ。以下はその時の対話の概略である。

2. 1 アメリカ人 IT コンサルタント デビッド＝ブズロー氏を招待

アメリカ人 IT コンサルタント デビッド＝ブズロー氏をゼミに招待し、意見交換を行った。

ゼミ長： 今日、お招きできて、光栄に思います。よろしくお願ひします。

ブズロー氏： こちらこそ、よろしく。徹底して語り合ひましょう。対話が重要です。対話こそ、問題を解決し未来を拓く最重要な手法です。そして、いつの時代も未来を担う若者が大切です。若者がどうかで、地域や世界も、決まる。

学生A： 今日、先ず、ブズローさんが学ばれたボストンでのテロ事件から話をはじめたいのですが。

ブズロー氏： OK。ボストンのテロ事件は、世界に衝撃を与えたね。僕もびっくりしたよ。学生時代、勉強して、友人と交流した場所だったからね。ボストンは米国でも一番歴史が長いことから、洗練されて民主的で平和的で世界からの人間を、快く受け入れる開放性がある理想的なエリアなんだ。それなのに、どうしてって感じだよ。容疑者もロシアからの移民だって話だ。精神的な疎外感が遠因だったとかいう意見も多いようだ。移民というのは、自分達の価値観や文

化を、もって入ってくるでしょ。それが、精神的なよりどころになるんだけど、その辺が自分が生きる場所で、拒絶されているように感じたり、受け入れることがないんじゃないかっていう精神状態から不安定にもなる。

学生 A : グローバリゼーション以前は、世界各地の文化・文明はそれまでその固有の土地に限定されたものだったが、グローバリゼーションによる世界への人間の移動によって、その土地固有の限定されたものではなくなり、活発に他の文化・文明と対峙するようになる。そこから、失敗すると、自分達の文化・文明・価値観・やり方みたいなものが理解されないことからの、ストレスが発生し、最悪の場合に、暴力的な行為や衝突まで発展するということですね。

ブズロー氏 : そうなんだ。ハンチントンの『文明の衝突』なんかは、その辺を予想したんだなって思う。現実の世界には、ものすごく多様な文化・文明・価値観があるわけでしょう。僕はアメリカ人で生まれはアリゾナ州で、一番伝統的な所で育ったから、「独立心。自助努力。行政に頼るな。行政は簡素で小さくていい。福祉も最小限で」みたいな雰囲気があった。

学生 B : それって、「共和党」の考えですか？ <笑い>

ブズロー氏 : よく知ってるね。アリゾナは共和党が強いんだ。 <笑い>

学生 B : ブズローさんは、共和党支持者ですか？ <笑い>

ブズロー氏 : ちょっと待ってくれよ。そういうわけじゃないよ。民主党への理解もあるから心配しないでくれ。 <笑い> ボストンは、民主党支持者が多いんだ。そこで勉強したんだよ。 <笑い> ボストンは民主党の影響力・伝統が強く、他人への働きかけもやさしいし、行政が助ける政策やアプローチがある。世界からの、移民も多いし、その人達の受け入れや面倒なんかもよくやっているよ。そのために、税金使うなら、いいってね。つまり、米国で一番移民にやさしいエリアでもあった。それなのにああいって疎外感からかテロ事件みたいなことが起きたってことで、米国でショックだったんだ。ボストンみたいなリベラルなエリアで、「文明の衝突」がまだあるんだったら、米国のもっと保守的なエリアでは今後も起こりえるっていう思いを多数のアメリカ人は感じたようだ。

学生 A : つまり、それだけ、自分達とは異なる文化・価値観を理解する受け入れる、まして、社会的なレベルで理解できる雰囲気までつくるってことは、大変なことだっていうんですね。

ブズロー氏 : そこだよ。そこが大切だ。「文明の衝突」を乗り越えるために、「文明間の対話」や「文化多様性の理解」みたいなことが、世界的にスローガンになっているが、なかなか簡単ではないよ。

学生 A : うーん。考えますね。人間個人のレベルだって、各人で価値観や感じ方・生き方・作法まであらゆる点でそれぞれ違う。出会いの最初は、その違いが感じないが、出会って、人間関係の密着度が高まってくると、いろいろな違いが分かってきて、理解できない許容できないことから摩擦が生じてくる。

学生 B : 確かに、人間関係の悩みは多いよね。ストレスの 90%以上もしかしたら 100% は人間関係から生じるっていうけどその通りだね。

- 学生C： 人間関係のプロは、「物理的・時間的な距離のバランスがあると人間関係はうまく行く」というよ。
- 学生B： どういう意味だい？
- 学生C： 恋愛でも男女でも、同性同士の友人、家族でも考えてみたらいい。24時間あるいは、毎日毎週の時間のかなりの時間をずっと一緒にいてごらんよ。そんなことが一年も続けば、子供ならまだしも、個人の価値観が確立した大人なら、嫌になってストレスが生じるだろう。一人にさせてくれってね。
- 学生B： うーん。確かにそうだ。ずっと一緒にいると、相手の何かが欠点みたいに見える、それがいやになってストレスみたいになるよね。
- ブズロー氏： だったら、どうすればいいんだ？
- 学生C： 時間的にも、一周間に1回とか、1カ月や2カ月に1回しか会わないというのなら、そんなストレスは生じない。距離も離れて、活動したり、生活していれば、ストレスもないよ。お互いの価値観や違いが、衝突する機会が最小限になるからさ。お互いそんなマイナスなことは聞かないし、ふれないし、知らないでいるからさ。
- ブズロー氏： なるほど。文明間でも、「ディスタンス（距離）」を必ず保って行くことだね。つまり、過度に、お互いの文明に介入しないってことか？
- 学生A： その点では、実はアメリカにも考えてほしいなんていう人が世界には多いですよ。＜笑い＞
- ブズロー氏： どういうことだい？
- 学生A： だってそうでしょ。アメリカは、民主主義・市場経済という価値観を最善として、世界に広めている。
- ブズロー氏： それが悪いことかい？＜笑い＞
- 学生A： 急速な市場経済化は価格下落やコスト競争もあおり企業もコスト競争上、賃金を抑制する傾向もあり、地域経済や従来の伝統的な社会体系を、破壊する面もある。
- ブズロー氏： ちょっと待ってくれよ。民間の市場経済が社会発展の原動力になるんじゃないか？アメリカをみてくれよ。アメリカがここまで、発展してこれたのは、自由な市場での競争経済の確固たるベースがあって、その中で、個人も企業も組織も、生き残り、勝ち残りをかけて、努力し闘ってきたからだよ。そのことがアメリカを強くし、活性化し再生し続けてるんじゃないか。日本は、民間や個人レベルの活力が、殺がれているから、活性化しないんじゃないか？
- 学生C： その辺は日本人の間でも議論がある。
- 学生A： 世界には、民主主義でない方がいい国もある。＜笑い＞
- ブズロー氏： びっくりすることを言うね。どうしてだ？
- 学生A： 永久でないけど、政治的リーダーシップは独裁的に強く維持しないと、人口が多いので、統治できず、不安定になる場合もある。
- ブズロー氏： そんなことはないよ。インドをみてくれよ？人口12億人以上だぜ。インドは議会制民主主義の国家だ。政党は、国民会議派・人民党……。複数ある。政権交替的な政権調整だってある。大統領も設置して民主的な大統領選挙だ

ってやってる。人口が多いから、とりあえず、独裁で行きたいみたいなことは、ウソだよ。逆に、民主主義じゃないということは、一部の独裁権限を握った少数の権力者が、限定された価値観や情報で戦略判断するわけでしょう？それがどれだけ恐ろしい国家的戦略ミスをするか、知ってるのか？ドイツのヒトラーや、第2次大戦までの日本がそうじゃないのか？

学生C： フランシス＝フクヤマ氏の『歴史の終わり』を、ブズローさんは、賛成なんですね。フクヤマ氏は、民主主義と市場経済が人類史において勝利をおさめた最終的な基本的社会形態だとした。

副ゼミ長： この辺でテーマを変えましょう。最近の話題は、アメリカのNSAの職員、スノーデン氏が、アメリカが世界中で盗聴をやっているみたいなことを暴露して、今は、ロシアにいますね。

ブズロー氏： 大変な話題だ。

学生B： ダブルエージェントだったんですか？<笑い>

ブズロー氏： よく分からないよ。<笑い>彼が、正義感から、暴露したのか？そうだとしても、国際政治の裏は、すごいからね。無意識に、ダブルエージェントみたいな、働きになってしまったのか？

学生C： 道義的な問題というより、アメリカの「グローバルマネジメント」の問題じゃないんですか？

ブズロー氏： 確かに、アメリカは基本的に、自由主義・民主主義のリーダーでそれらを世界に広めることが国家的使命と考え、世界の安定に寄与することを使命と考えている。その使命達成には、言葉や世論・文化的影響力みたいなソフトパワーだけじゃだめだと考えている。現実の国際政治は、力の激突、駆け引き、陰謀、密約も当然あり、いわば「壮絶なパワーファイト」なんだ。それゆえに、軍事力も必要だ。専守防衛、抑止力という意味だよ。誤解しないでほしい。<笑い>さらに、世界や「仮想敵国」なんかが、どんな動きをしているのかを、迅速に早期にキャッチして、対応するためには、「インテリジェンス・諜報力」は絶対に必要となる。

ゼミ長： さて、歴代のゼミで、グローバリゼーションの発展過程を学習してきました。毎年、先輩から後輩へと受け継がれてきた学習です。ブズローさんの意見も聞きながら、復習してみよう。グローバリゼーションの発展過程に関しては複数の分析があるが、歴代のゼミでは、次のようにグローバリゼーションの発展過程の理解をまとめてきた。発展過程分析としては、1800年代頃からスタートさせている。1800年代は、1700年代後半のイギリスでの技術革命・産業革命を端緒に、1800年代には、西欧の各地で資本主義経済が急速に発展し始め、1800年代から1900年代初頭にかけては、世界各地で、エリアと人間の囲い込みないし統合のトレンドが発生し、やがて、近代的な国家(Nation-state)が多数、成立していった。そして、やがてそのトレンドは、「国家第一主義(State First)」とも呼べる過度な国家中心主義の時代をつくって行った。その歴史的流れは、第1次世界大戦・第2次世界大戦という国家が世界レベルで激突する大戦争という極点に達した。

- ブズロー氏：1800年から1900年代前半の世界を考えると、今のボーダーレス化が進むグローバリゼーションの様相とは、全く対極的な雰囲気だね。だいたい、アメリカ自体が、独立したのが、1776年で、1800年代は、途中で、南北戦争で国家分裂の危機まであって、それを乗り越えて、ようやく国家として、まとまって発展していくような時代になった。とにかく、1800年代から1900年代前半は、国家・国家・国家の時代、国家中心主義の時代といえる。基本的に、その時代の人間の思考スケールの限界は、国家までだった。1800年から1900年代前半の時代には、「グローバリゼーション（地球一体化）」という、発想は人間の頭にはなく、もちろんそんな言葉自体ない。「国際協調主義」みたいな言葉だって、ほとんどないに等しい。仮に、誰かが、そんなことを言っても、幻想・ファンタジーとしか思われなかつただろう。
- 学生A：人間の思考は、驚くほど、時代に制約され、影響されている。今、自分達が信じている思考、言葉、発想も、現代という時代に、かなり影響された固定観念で、永遠に継続するものでもない面が多い。だから、そんな固定観念は信じ込まない方がいいに決まってる。
- ゼミ長：1945年の第2次大戦の後から、極端な国家主義の反省が始まる。即ち、極端な国家主義による世界大戦の悲劇への反省から、「国際協調主義」が発展した。国際的な利害調整への制度設計も提案され、国際協調主義を具現化する制度が多数形成されていった。具体的には、国際連合（UN）、国際通貨基金（IMF）、世界銀行（The World Bank）、関税と貿易に関する一般協定（GATT）等です。世界全体で、国益を越えた「世界共通の利益・人類共通の利益」を考える歴史が本格的にスタートしたとも言える。
- ブズロー氏：2度の世界大戦を経験してやっと、世界全体で反省して、人類共通の利益・国際協調主義のための国際的制度という思考まで、至ったというわけだ。人間も人類全体も同じで、ものすごい経験があつてやっと変化できるんだね。ところで、この歴史的転換点、つまり国連、IMF、世界銀行、GATTなんかの国際協調主義の制度の設計・成立だけど、ここで一番重要なことは、その流れをつくった推進力は、当時、国際政治で一番力をもってきた、アメリカでしょう。つまり、世界のトレンドは、やはり、その時代で、一番力がある大国、超大国が、どう動くかで、決まる面が強い。さらに言えば、一番力がある大国、超大国が、例えば、アメリカだとしても、そのアメリカの国家戦略の方向に影響を与えるリーダーシップをとるトップスタッフは、どう考え、動くかにかかっていると、考えるべきじゃないかな。仮に、第2次世界大戦後だって、もしアメリカのトップスタッフが、いわゆる「孤立主義」で、アメリカは力はあるが世界にはかかわりませんでことを考え出したら、国連、IMF、世界銀行、GATT等の国際協調主義の制度は形成されず、時代は、別の方向に行った。アメリカには、今でさえ、世界のごたごたとは関わらず、国内優先で行ってくれ、という孤立主義があるんだ。「カントリー・ファースト」なんだ。だいたい、世界にかかわって責任を負えなんてことになると、政府規模が大きくなるでしょ。それが税金の増

大になって、アメリカ人は無用な税金は「個人から自由を奪う行為」と考えるから嫌でね。だから「カントリー・ファースト」でその結果税金が少なく自由の拡大になればハッピーだっていう考えの人も多いんだ。

学生 A : 確かに、特に第 2 次大戦前のアメリカのトップリーダーには、世界全体を包括的に責任をもつという発想も強くはなかった面もある。ウィルソン大統領が国際連盟を提唱しても、アメリカ主導で世界をまとめる雰囲気にならなかつた。国際連盟にアメリカは入らないことになった。やはり、1930 年代以降の世界恐慌の世界的動乱の中で、第 2 次世界大戦と戦後処理に対応する、ルーズベルト政権・トルーマン政権の時代あたりから、変化したんですか？

ブズロー氏 : そうだね。ルーズベルト政権はアメリカの国際政治対応に大きな変化をもたらしたよ。第 2 次大戦では、ドイツの勢いはすごかった。フランス・イギリスも含めて、ヨーロッパ全体に大手をかけたのが、ヒトラー支配下のドイツでしょ。アメリカは、自由主義・民主主義の国家としての、国家的使命を自覚したんじゃないかな、ルーズベルト政権になってからは、世界へのアプローチを、軍事的にもインテリジェンスの面でも加速させる。ヨーロッパ戦線での、ドワイト・D・アイゼンハワーやジョージ=パットン、太平洋戦線でのダグラス=マッカーサーのリーダーシップが、その時代のアメリカの国家的使命自覚の象徴的なものだって言う人も多い。

ゼミ長 : 議論を第 2 次大戦後の、1950 年代以降に進めましょう。世界レベルで国際協調が進むが、1950 年代・60 年代・70 年代の基本は、『アメリカを中心とした自由主義・民主主義・資本主義圏』、『ソビエト連邦を中心とした社会主義・計画経済圏』に、世界は分断され、地球一体化（グローバル化）とはとても言えない状態が長く続き、現在のようなグローバリゼーションが現出するなんてことは、全く予想できなかった。おそらく、世界の圧倒的多数の人々は、『アメリカを中心とした自由主義・民主主義・資本主義圏』・『ソビエト連邦を中心とした社会主義・計画経済圏』を基軸とする「分断された世界体制」が半永久的に続くものと考えていたと思う。

副ゼミ長 : 私たちの世代は、1990 年代生まれがほとんどで、自由主義・民主主義・資本主義圏はわかるけど、社会主義・計画経済圏とかが、よく分からないので、少し、学習しよう。

学生 C : なぜ、社会主義・計画経済圏という社会システムが、人類にあったんだろう。しかも、ソ連・東ヨーロッパ・モンゴル・中国・ベトナム・キューバなんか、世界の 3 分の 1 程の版図をもつ勢力にまでなった。

ゼミ長 : 1800 年代頃の資本主義の発展期の矛盾から考えてみるといい。資本主義の原型は、極端に言うと、弱肉強食の強烈な競争経済だ。成功する人間やグループは、どんどん成功して富を増して行く。成功できなければ、貧困になり、貧困のサイドはその大半が、一部はそこから抜け出すかもしれないが、大半は貧しい状態が続く。極端な格差社会だ。そこで、議会制民主主義なんかが、なんとか発展して、少しは良くなるが、最初は税金払っている者しか投票で

きませんみたいな状態もあったし、金持ちの意見も代弁されるから、そんな極端な格差社会はなかなか直らない。それなら、社会主義革命だってことになってきた。貧しい働く人が、革命を起こして、実力行使で、生産手段つまり工場・会社・店なんかを掌握して、その後、工場・会社・店を共有・国有にして、計画的に経済社会を管理・運営すれば、自由経済でやっていた時代の景気変動だってなくなり、うまく安定的に経済社会はまとまり、貧しい人もなくなり、平和な世の中になるって考えた。社会主義革命後の政治的リーダーシップは、それ以前の金持ちの意見や影響力が強くなるようないわゆるブルジョア民主主義はやめて、貧しい働く人たちのグループが最も力を持つようにしようと考え、それがプロレタリアート独裁、現実の一党独裁で、その政党（貧しい人を代表した政党）のみが政府機関をも動かすってシステムにしようと考えた。社会主義・計画経済圏の誕生の歴史的背景には、「資本主義の格差社会で虐げられた貧しい人のために」というのがあったと思う。

副ゼミ長：なるほど。貧しい人を救いたいとってできた統治制度が、なぜ歴史の上で最終的になくなって行くのだろうか？

学生C：そこは、いろいろ議論や分析があるし、学問的にも重要なテーマなんだろうけど、結局、理念は高尚だったが、現実はうまくいかなかったってことかな？

ゼミ長：そうかもしれないね。1920年代以降誕生した社会主義の計画経済の諸国で、貧困が少なくなっていく平等化した社会の実現は、ある水準まで達成できたかもしれない。しかし、長期にわたって、企業・工場・会社・店の共有・国有が続くとどうなるのか？競争がない、つぶれない組織がどういうことかを、考える必要があるよ。

学生B：確かに、個人でも企業・組織でも同じだけど、競争がない、つぶれないとか、なんとか生活できますとかいう、全く危機感のない状態っていうのは、やはり、個人や組織を劣化させるよね。

ブズロー氏：そこだよ。危機感のない社会制度、組織、そこで生きる人間の行動は、知らず知らずに、どんどん非効率になって行く可能性がある。実際、社会主義諸国の国有企業なんかは、だんだん生産性は上がらなくなり、生産する物の質も良くならない傾向が続いたようだ。対照的に、アメリカみたいな資本主義諸国では、企業も個人も生存競争にさらされ、危機感があるから、どんどん努力して工夫もする。がんばって働く。その結果として、経済も社会も発展して行ったわけだ。アメリカでは、市場経済、自由競争、自由が、いろいろあるかもしれないが、国家全体、社会全体を、活力を維持して、中長期的には発展させ続けていくっていう信念があるね。基本は民間企業の自由経済で行くのが一番なんだ。それがベースじゃないか。人に迷惑をかけない限り、人間の行動、その集合体である民間企業の行動は、自由でいい。政府が不必要に、規制したり、課税したりするのは、そういった自由・自由経済の活力を殺ぐことで、悪なんだ。やっちゃいけない。

学生B：さすが、自由・自由経済の話になると、ブズローさんは、いつも熱いですね。

<笑い>アメリカがいかに『自由』を大切にしているか、よくわかりますよ。
『自由』こそ最重要な価値なんですね。『自由』に反することには、対抗するのがアメリカ人なんですね。<笑い>

ゼミ長： 第2次世界大戦後の多くの資本主義諸国は、自由経済をベースにしたが、見逃せないことは、各国で福祉政策を充実させるようになったことだ。議会制民主主義の機能の発展で、貧しい人の意見を代弁する政党の躍進も背景にあった。福祉政策の財源として税が必要になるわけだが、特に累進課税制度で富裕層に重く課税して、そこから吸い上げた資金もあって福祉が充実した。富裕層から貧困層への所得移転だね。次第に、1800年代のような古典的な資本主義は、格差が是正された、福祉の充実したより平等化された資本主義社会に高度化して行った。

ブズロー氏： そうなんです。民主主義さえしっかりしていれば、多様な人間・グループの意見を反映できる。アメリカだって、自由経済による貧富格差が生じて、民主党なんかの政権によって、貧困層の意見を吸い上げて、福祉政策が充実した。特に、1960年代のジョンソン政権以降は、福祉政策が充実した。

学生B： 社会主義諸国も、経済を安定させ、社会を発展させていった。その後、非効率なこともあったが、それでも、社会主義諸国においても、非効率性は問題だったろうが、それだって極端に不満があったり餓死者があったりして、崩壊するわけでもなかったんじゃないか？つまり、社会主義諸国は、資本主義諸国になる必要もなく、独自の社会システムを機能させて行く路線で行けば、それも十分可能だったんじゃないか？

副ゼミ長： そうだよ。事実、1970年代までの国際政治を考えれば、キューバの社会主義化や、ベトナム戦争での社会主義勢力の支援を受けた北ベトナムの勝利なんかを考えても、国際政治では、社会主義圏の勝利を思わせる出来事が続く。対照的に、1970年代の資本主義諸国は、深刻な石油ショック以来の経済混乱、インフレと不況の同時発生、スタグフレーションだとか、経済も社会も不安定で、悪化していたようだ。社会主義圏優勢の歴史的潮流もあった。そういった時代だったから、日本や西側の資本主義諸国にも、社会主義的制度の信奉者はかなり多かったと習った。

学生A： 人間の思考は、自分達の生きている時代に無意識にかなり影響されるんだね。今も同じだ。この時代、この社会にいる自分たちは、時代や社会が当然だと考えている価値観に影響されている。それらは決して絶対的なものではないんだ。トラップにかけられる可能性を常に警戒して自分の頭脳で考えることが大切だね。『自分独自の思考・世界的視野・比較的視野・多文化的視野・超歴史的視野』で自分の頭で考えないと間違うんだね。

ゼミ長： さて、1970年代までの歴史的トレンドが継続すれば、世界で社会主義圏の拡大が持続したと考える。しかし、時代が大きく変化したのは、やはり1980年代だ。1980年代の国際政治の大きな変化にグローバリゼーションへの突破口が現出した。誰も予測できなかった変化だ。

ブズロー氏： そうなんだ。1981年のアメリカにおけるレーガン政権の誕生のインパクトは

大きかった。僕は、アリゾナ出身で、アリゾナなんかの西部では、共和党支持者が多いんだけどね。レーガンは、最高のヒーローになってる。レーガンの基本戦略は、「力による平和」だった。つまり、レーガンは、圧倒的な、軍事力・技術力・諜報力・経済力・同盟力・メディア力・文化力などの国家としての多様な「力」を最高度に高め、社会主義圏打倒を目指した。実際、レーガン政権は、ものすごい軍事力拡大を進めた。陸海空の通常兵器のレベルアップ、戦略兵器の開発・拡大を進め、中距離核ミサイルの欧州配備等を断行した。さらに宇宙空間から敵対国のミサイルを捕捉し破壊するといういわゆる SDI (Strategic Defense Initiative: 戦略防衛構想) まで打ち上げた。特に、SDI は、それまでの MAD (Mutual Assured Destruction: 相互確証破壊) という、米ソの核抑止力論、つまり、戦略核兵器は現実には使えないから、米ソは勢力的に均衡し、あえていえば、資本主義圏と社会主義圏は均衡・併存するとも拡大解釈される国際政治戦略理論自体を、超越して、国際政治に大変化をもたらす可能性を有するもので、当時のソ連のトップリーダー達に大きな危機意識を与えたようだ。さらに、レーガンは、イギリスのサッチャー政権、日本の中曽根政権、ドイツのコール政権等との共闘姿勢をアピールしそれら西側諸国との強い同盟関係を構築し、国際的な外交ネットワーク上でも、ソ連を包囲し追いつめる雰囲気をつくっていった。

学生C： レーガンの手法は強硬なように思えるが、世論は支持したのですか？

ブズロー氏： 賛否両論だったんじゃないかな。強硬すぎて世界戦争でも起きるんじゃないかと、本気で思った人も多く、世界中で、反戦反核運動が台頭した。日本やヨーロッパの反戦反核運動はすごい勢いがあった。特に、ヨーロッパでは、米国の中距離核ミサイル (INF) 配備があったから、深刻だった。しかし、アメリカ国内では基本的に支持を得たようだ。特に保守派が強く支持した。事実レーガンは 1984 年の 2 期目を目指した大統領選挙で、全米 50 州中のなんと 49 州で勝利してしまった。

ゼミ長： とにかく、レーガンはアメリカの「力」を強化して「力」でもって現実の国際政治を変える戦略を進め、「力」で社会主義圏打倒を進めたわけだ。レーガン政権の力で圧倒する国際政治戦略に、1980 年代前半時点では、ソ連も対抗した。しかし、その過程で、ソ連の最高指導者 (ソ連共産党書記長) が、ブレジネフ、アンドロポフ、チェルネンコと、3 人続けて死去した。国家最高指導者のたて続けての死去は、最高リーダーシップレベル、統治レベルでの、ほころびを予感させた。そしてついに 1985 年 3 月、ゴルバチョフがソ連の最高指導者に就任した。ゴルバチョフは、従来 of ソ連の指導者とは違う政治戦略をもっていた。ゴルバチョフは基本的に、競争危機感がなく非効率な経済活動に浸食されたソビエトの国内社会経済改革の活性化の必要性を強く感じ、国家レベルでの、あらゆる面での、ペレストロイカ (再編・改革といった意味) を強く訴え始めた。

学生C： ゴルバチョフは、なぜ、ペレストロイカを始めたんだろう？

ブズロー氏： ゴルバチョフは、「現実の西側の様子」を見ていたからだと思うよ。最高

指導者になる前に、実際、欧米諸国を視察して、現場・現実を見ている。ゴルバチョフの側近になる、ヤコブレフは、アメリカで研究していたこともあって、その後カナダ大使になるんだけど、北米のダイナミックな経済、自由、民主、活力の姿、アメリカ人のフレンドリーさなんか、分かっていたのか、かなりゴルバチョフに影響を与えたようだ。その点、中国の鄧小平も同じで、実際に欧米の西側諸国のダイナミックな成長・発展・繁栄・市井の人々の生活する姿をみている。「世界の現実」を見た人の視野は広く確かだ。その後、中国の鄧小平は、「改革開放」を断固進め、今の中国の大発展の基盤をつくった。

ゼミ長： ゴルバチョフの改革の基本は、国内経済社会を活性化するために、「自由度を許容した国内政策」の実行に至った。実は、この「自由度を許容した」ことが、指導者はそれほど分からなかったかもしれないが、現実には自由な言論・行動・ビジネス・ひいては生き方なんか、抑性されていたから、人間の内側に蓄積された、思い、欲求を、爆発させて行くことになる。さらに、ゴルバチョフは、国内改革を進展させるために、対外戦略上での負担を軽減するために、「新思考外交」を宣言し、積極的に西側との対話・軍縮を進めるスタンスを示した。その新しいスタンスの中で、1985年ジュネーブ、1986年レイキャビック、1987年ワシントン、1988年モスクワにおいて、レーガン・ゴルバチョフによる歴史的な米ソ首脳会談が開催され、INF（中距離核戦力）全廃条約、戦略核兵器制限条約への進展等、国際的安定への具体的な成果もあらわれていった。最も衝撃的だったのは、1986年頃だったか、ゴルバチョフが、ソ連がブレジネフ以来の社会主義同盟諸国の国内政策等に対して国際的な社会主義共同体の安定のためにソ連が制限するというニュアンスの「制限主権論（ブレジネフドクトリン）」を否定し、社会主義各国は、自国の意志決定、世論で国のかたちを決めて行くことを認めたことだった。その結果、それまではソ連の影響下で、大胆な国家戦略転換ができなかった世界中、特に、旧東ヨーロッパの社会主義諸国で一挙に、政治的には民主主義化・自由主義化が、経済的には資本主義型市場経済化が、選択されていった。1989年11月、東西分断の象徴であったベルリンの壁は崩壊し、12月には、ブッシュシニア・ゴルバチョフによって、自由主義圏・社会主義圏間での争いとしての冷戦の世界体制の終結自体が宣言された。1991年、急速な世界の自由主義化、民主主義化、市場経済化の拡大の中で、第2次世界大戦以降国際政治において世界の社会主義陣営の司令塔として機能してきたソビエト社会主義共和国連邦自体が崩壊し、世界各地の社会主義体制も消滅に向かった。

学生A： ゴルバチョフやソ連のトップスタッフは社会主義システムの維持を考えなかったのだろうか？ゴルバチョフ時代だって、「絶対に社会主義体制は基本的に維持する。国際政治面では社会主義共同体を固持する。そのための制限主権論も手放さない」とつっぱねる路線でいけば、社会主義体制の維持も可能だったんじゃないかな。

ブズロー氏：そうだね。西側との差はひろがるが、何とか、ミニマムなラインで、存在することだって可能だったし、1991年の8月には、社会主義体制維持を主張したグループが、政変を起こしたけど、失敗した。国民の大半は、自由化・民主化・市場経済化を望み、あの時は、デモなんかが、すごかったね。基本は、民意・世論が、歴史を決めるということか。ただ、民意・世論は、メディアだのに外部的に影響を受けて規定されることも忘れちゃいけないけどね。それと、やはり、最高指導者としての、ゴルバチョフの決断は大きかった。冷戦終結・グローバリゼーションへの突破口は、レーガン・ゴルバチョフの2人の偉大な指導者のリーダーシップにあったとも言えるね。

ゼミ長：少なくとも自然に社会主義体制の崩壊があったわけじゃなく、何か強力な世界レベルでのアプローチ・戦略断行があったから、あれだけの、国際政治上の変革があったんだね。何れにしても、1991年のソ連崩壊後、1990年代後半、2000年以降と、全世界の至るところに、自由主義・民主主義・市場経済が広がり、世界各国の経済的な結びつきをもたらすグローバル資本主義が、加速度的に諸国を緊密化させ、地球全体が一体化して行く、グローバリゼーションの時代に、人類は移行していったということですね。

図 3：グローバリゼーション発展過程概略

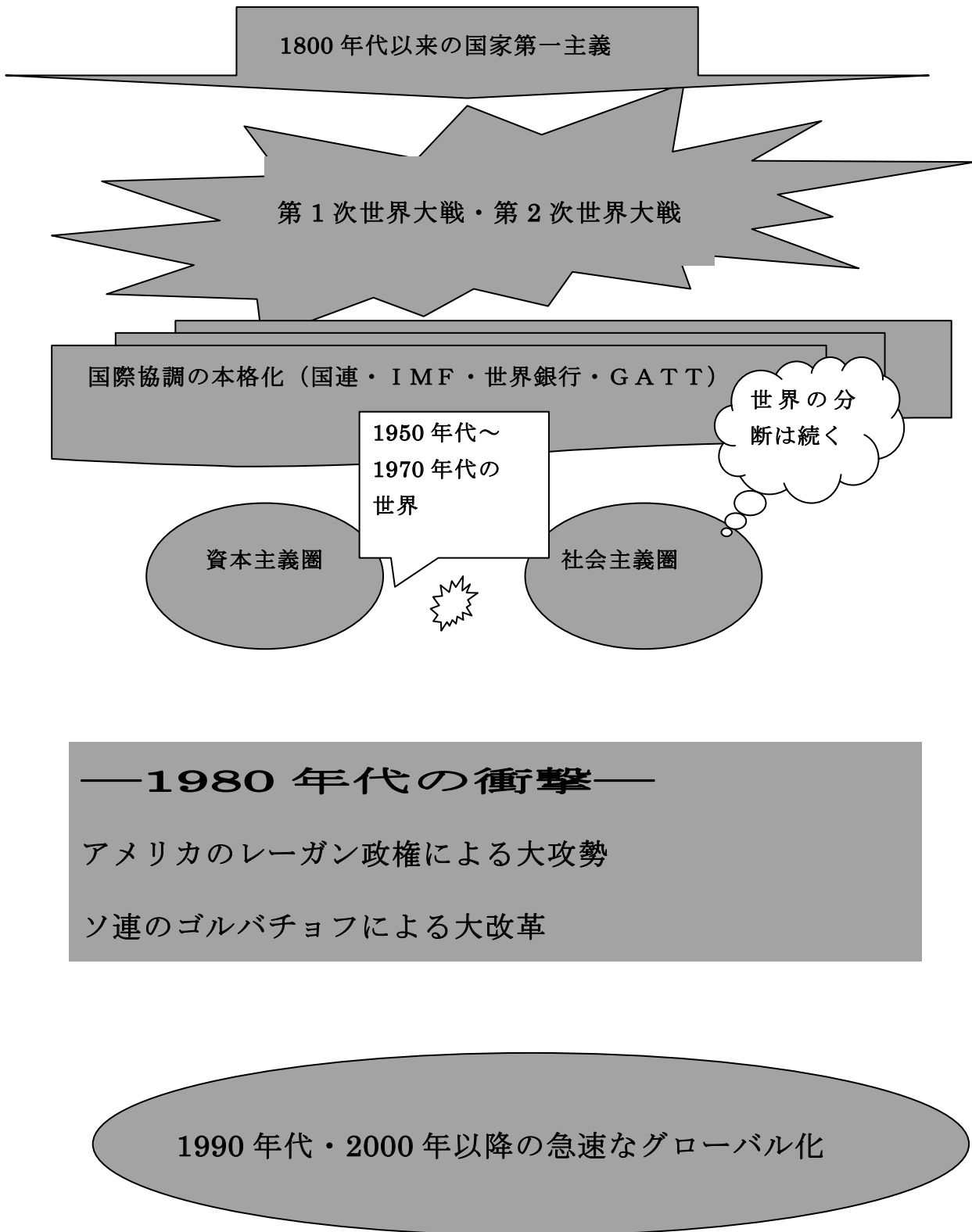


表 2：グローバリゼーション関係年表

年代	歴史的事項
1800 年代	国家 (Nation-state) の確立と拡大の時代 「国家第一主義 (State First) ないし国家主義」
1914 年～18 年	第 1 次世界大戦 (国家主義の悲劇)
1939 年～45 年	第 2 次世界大戦 (国家主義の悲劇)
1940 年代後半 1950 年代 1960 年代 1970 年代	—国家主義の悲劇の反省から国際協調主義へ— < 国際協調主義を進める制度の確立 > ① 国際連合 (UN) ② 国際通貨基金 (IMF) ③ 世界銀行 (The World Bank) ④ 関税と貿易に関する一般協定 (GATT) ↓ それでも世界の基調は「分断」 「西側陣営 (自由主義・民主主義・資本主義圏) V S 東側陣営 (社会主義・計画経済圏)」 という対抗軸
1980 年代	本格的なグローバル化への突破口が開かれた 10 年
1981 年	アメリカでレーガン政権の誕生 「力による平和 (Peace through Strength)」戦略 軍事力、経済力、パワーで、東側陣営を圧倒
1985 年	ソ連のゴルバチョフが最高指導者に就任 自由度を許容した国内政策・対外政策 ↓ 東側陣営の溶解ないし崩壊へ
1989 年	ベルリンの壁崩壊
1991 年	ソビエト連邦の崩壊
1990 年代後半 2000 年代	グローバル資本主義の急速な展開をベースにグローバリゼーションが加速

アメリカ人ITコンサルタント David Boudreau 氏



2. 2 バングラデシュ人留学生エラハム＝ナスラット氏を招待

バングラデシュ人留学生エラハム＝ナスラット氏をゼミに招待し、意見交換を行った。

ゼミ長： 今日、ようこそゼミにいらっしゃって下さいました。よろしくお願いいたします。

ナスラット氏： こちらこそ。

学生A： 先ず、バングラデシュの基本情報について、質問させて下さい。人口はどのくらいですか？

ナスラット氏： 現在、約1億人になっています。

学生A： かなり多いんですね。驚きました。出生数が多いということですか？

ナスラット氏： そうですね。女性も男性も比較的早期に結婚して、家庭をつくれます。

学生C： 日本は少子化で、どんどん出生数が減って大変になってます。1970年代の出生数が、約200万人。現在では、約100万人と、約50%減で、政府が、20年以上、少子化対策をやっても、効果は出ていません。

ナスラット氏： 日本の少子化は、深刻ですね。よく十分豊かじゃないから、子供が生まれないというけど？

学生A： 分かりません。バングラデシュの1人当たりGDPは、700ドル程で、日本の1人当たりGDPは4万ドル以上です。貧しくたって、早期に結婚して、家庭持つ場合も多いんですよ。

ナスラット氏： 確かに、そうですね。

学生C： 生き方の多様化の問題だと思います。日本では、海外渡航だ、自由な

勉強だ趣味だなんだと、楽しいこと、充実したことがたくさんある。生き方の選択肢が、多様化して、増えていることでしょう。自由の重要性への認識も強い。アメリカ人並みに、自分の自由を大切にして、束縛されたくない、自分のお金、時間、精神的エネルギーを、殺ぐような生き方はしたくない。まして、法的制度的に束縛されるなんてまっぴらさってという心が急増している。

ナスラット氏：分かります。日本に来て、びっくりしたことは、自由に生きれる国なんだなって、思いましたよ。バングラデシュじゃ、人によっては、結婚しないと、生きていけないんですよ。だから、早期に結婚する。日本は、皆、ある程度、学歴をつけてしまえば、生きていけますよね。皆、幸福な環境にいますよ。

学生B： バングラデシュの人にそう言われて、納得できました。ところで、バングラデシュの歴史ですが、独立は、1971年ですか。わりあい新しい国家ですよ。

ナスラット氏：そうです。1900年代初頭までは、現在のインド・パキスタン・バングラデシュのエリアは、イギリス（大英帝国）の統治下にあった。

学生B： アジアの大半のエリアが、いわゆる西洋強国の統治下にあったわけですね。

ナスラット氏：独立国家は、日本とタイのみでした。

学生C： マハトマ＝ガンジーなんかの、対イギリス独立運動が、歴史の一つの転換点ですね。

ナスラット氏：マハトマ＝ガンジーは、偉大な指導者だったと思います。

学生C： イギリス統治下のそのエリアでは、独立を目指した、複数の運動・指導者がいた。武力行使も想定した力を前面に出した独立方式を主張した、グループや指導者も多かった。

学生A： 日本の軍が支援したグループもあった。チャンドラ＝ボースだね。あの時代は、西洋VSアジアという思考をする人もいたようだ。

ナスラット氏：難しいテーマですね。見方の問題かもしれませんよ。

学生B： 日本が軍事的にアジアに入ったのは事実で、そのプロセスで、摩擦や、迷惑をかけた面が、なかったとは絶対に言えない。ところで、インド・パキスタン・バングラデシュは、なぜ、別々に独立することになったのですか？

ナスラット氏：根本は、宗教の問題ですね。パキスタンとバングラデシュは、イスラム教徒、インドはヒンズー教だった。イスラム教は強烈な一神教です。ヒンズー教は、いろいろ神がいて、多神教ですね。戒律も違います。

学生C： うーん。宗教の違いが、国家をわけるというのは、日本人には、少しわからないけど、そういった現実は、世界の歴史に多いケースでしたね。

ナスラット氏：宗教って、信じるのが前提でしょ。信じるって、人間のアクションや方向性を、強くしますよ。特に、宗教が、組織化されると、そのエ

エネルギーは強い。日本だってそんな面は、あったんじゃないですか？

学生B： そうかな？日本にあったかな？

ナスラット氏：太平洋戦争中の日本は、何か信じて、国家全体で、ものすごいエネルギーを出していたみたいじゃないですか。

学生B： 確かに、そうですね。信じるってすごいエネルギーを出すんですね。

ナスラット氏：宗教的なものが、組織された場合、指導者が重要になってくる。

学生A： インドエリアの独立を指向した時代、ヒンズー教・イスラム教の指導者が、粘り強く、対話して、一緒に、国家をやって行こうみたいになっていれば連合体制かなんかで独立したかもしれない。

ナスラット氏：そうですね。ガンジーは、そのような方向を指向した。

学生B： ガンジーは、イスラム教徒・ヒンズー教徒の和解、協力のために、戦いました。ガンジーの手法は、非暴力だった。デモをやったり、抗議したり、対話したり、塩の行進とか行進したり、あと断食のハンガーストライキで、ようするに暴力を使わないで、民衆の気持ちに訴え続けた。民衆の気持ちが変わって、それが圧倒的に独立ということになって、現実に独立した。結局、歴史を根底から動かしてしまうのは民意だと分かった。軍事力も政治権力も経済力も、圧倒的な民意には勝てない。その後の、マルティン＝ルーサー＝キングの公民権運動も、民意を動かして公民権実現に進めた。ベトナム戦争反対の民意があまりに強く、軍事大国アメリカも、撤退を決断せざるをえなくなる。1980年代末のベルリンの壁崩壊、旧東ヨーロッパを中心とした、自由化・民主化の流れも、基本的には、非暴力で、民意が、歴史を動かした。この一点は、やはり、かなりガンジーが人類に分からせた面があるよね。今は、ヒンズー教・イスラム教の対立はありますか？

ナスラット氏：国内でも、インドでも、ありません。実際、インドとバングラデシュでは、イスラム教徒・ヒンズー教徒、仲良く働いてますよ。

学生B： そうですね？時間が経過すると、変化できるんですね。時間が解決するとかは本当ですね。

ナスラット氏：ただパキスタンとインドはまだ、摩擦がありますよね。インドの人だって、パキスタンに近接したエリアにはなかなか行けないって聞きますよ。

学生B： 確かに、両国とも、核兵器まで持って、対峙しています。

ナスラット氏：そうです。

副ゼミ長： イスラム教では、一日何回、祈りますか？

ナスラット氏：5回です。マッカの方向に向かって祈ります。

副ゼミ長： 断食は？

ナスラット氏：ラマダンです。

ゼミ長： 口にしていけないものは？

ナスラット氏：お酒・豚肉・タバコなんかです。

ゼミ長： 献金はしますか？

ナスラット氏：皆します。助け合うのが、イスラム教徒です。

ゼミ長： 人間は死んだら、次の世界はありますか？

ナスラット氏：あります。

学生A： うーん。確信がすごいですね。心に強い確信がある人は、何か強いんですね。微動だにしないというか、ブレナイというか、恐れないというか。卒業後は、どうされますか？

ナスラット氏：日本の企業に就職します。

学生A： そうですか？今、日本で就職する人は増えてますか？

ナスラット氏：増えてますね。

学生A： ありがたいことです。日本はどんどん、少子化で若い働き手が減って行く。製造現場なんかでは、日本人の若者は、集まらないで外国人研修生という形で来てもらってカバーしている。日本の大学なんかの、高等教育で学び、卒業する留学生は、日本の地域で就職してほしい。それが地域の活力になるし、その人達が母国に送金すれば、母国だって豊かになる。いいことじゃないですか。

ナスラット氏：私もそう思います。日本はもっともっと外国の人を柔軟に受け入れる制度をつくって行ってほしいです。

学生B： 日本のよいと思ったところを教えてください。

ナスラット氏：自然が綺麗ですね。山や川、緑、空気が最高です。

学生B： それは、多くの外国人の方が、言うことですね。それからどんな点？

ナスラット氏：平和ですね。犯罪も少ない。

学生B： 確かに、最近では、犯罪が増えていますが、治安は何とか最悪にはなっていないということですか。油断すると怖いですけどね。＜笑い＞

ゼミ長： 今日はありがとうございました。イスラム圏の方ははじめてで、とても勉強になりました。

ナスラット氏：こちらこそありがとうございました。

バングラディッシュからの留学生 Elhum Nusrat 氏



2. 3 カメルーン人留学生レイナー＝タベタンド氏を招待

カメルーン人留学生レイナー＝タベタンド氏をゼミに招待し、意見交換を行った。

ゼミ長： お会いできてうれしいです。ゼミで、はじめてのアフリカからのお客様です。よろしくお願いします。

タベタンド氏： こちらこそ、よろしくお願いします。

ゼミ長： アフリカというと、日本人には、一番遠方という世界ですが、どうやって、カメルーンまで、行けますか？

タベタンド氏： アフリカから日本も遠方とおもったけど、来たら意外に近かったよ。＜笑い＞アフリカ大陸へは、バンコク・シンガポール・ロンドン・パリ・アムステルダムなんかを経由していけば、そうだね、30時間もあれば、行けるよ。

学生A： アフリカ大陸は、人口はどれくらいですか？

タベタンド氏： 現在、8億人くらいかな。増えて行くと思う。

学生B： アフリカ大陸は広いですが、どうやって理解すれば、よいですか？

タベタンド氏： そうだね。まず、北アフリカと、サハラ砂漠以南のアフリカを、分けて考えるのが一般的かな。北アフリカは、モロッコ・アルジェリア・チュニジア・リビア・エジプトなんかの国家で、地中海に面していて、マグリブとか言う場合もあるけど、イスラムの文明圏の雰囲気強いね。ヨーロッパからも近いから、ヨーロッパ的な影響もあるエリアだ。

学生B： サハラ以南は、どうですか？

タベタンド氏： かなり違うね。やや開発が遅れた面もあって、大変な歴史もあった。

ただし、南アフリカは違うよ。あそこは、アフリカ大陸で一番、発展して、繁栄して、資源も豊富だ。いろいろ問題はあったが、アフリカのリーダーシップをとる国家だね。大英帝国時代も、イギリスが一番重要視したのが、アフリカでは、南アフリカじゃないかな。資源も豊富だしね。ロンドンの南アフリカ大使館が、かなり立派なことは、その辺の歴史を象徴してるんだけどね。

副ゼミ長：　　そうですか。ところで、グローバル化が進んで以降の、アフリカはどうですか？

タベタンド氏：　グローバル化の恩恵は大変なものだ。ありがたいよ！

副ゼミ長：　　と言いますと？

タベタンド氏：　だって、1990年代末くらいからか、カメルーンにも、中国・アメリカ・ヨーロッパなんかの企業がものすごい勢いで進出して、地域や街が大発展したよ。

副ゼミ長：　　どんな会社ですか？

タベタンド氏：　靴、服、小物、いろいろなマシーンの部品の製造関係の会社・工場、それから、スーパーストア、ショッピングの店、銀行、ホテル、旅行会社、商社、外食産業、どんどん増えているよ。

学生C：　　現地の人はどんな面で、よろこんでますか？

タベタンド氏：　まず、仕事につけるってことだよ。皆、人生で一番大切なのは、仕事だって考えるよ。仕事がなかったら、生活できないし、不幸じゃないか。仕事があって、それからなんでも人生がトライできるんじゃないか。仕事を与えてくれる世界中からの企業には、皆感謝してる。それから、あとは、商品が増えて、バラエティになって、楽しいし、華やかになったね。

学生：　　そうですか。日本の人は、そのあたりが、恵まれていて、あるのが当たり前みたいになって、鈍感になっているのが、怖いですよ。

タベタンド氏：　そうだよ。仕事や商品。自分達にないって状態を、考えてみた方がいいよ。そうすると、ありがたみがわかるさ。僕らみたいに、ないことを知ってるから、ありがたいって思えるんだ。

学生A：　　グローバル化の恩恵を一番受けているのは、アフリカですね。

タベタンド氏：　そう思うよ。

学生A：　　しかしなぜ、そんなに企業が進出するんでしょうか？

タベタンド氏：　冷静に考えると、理由は、3つかな。第1に、人件費の安さだ。今のアフリカなら、1カ月1万円もあれば、人を雇える。労働コストを考えた企業が進出しないわけないよ。第2に、市場だ。簡単に言えば、アフリカは、何もなかったから、何かつくって売る、仕入れて、売れば、どんどん売れる。BbyCで利益が出るわけだ。ビジネスを考えた人なら、狙うでしょう。第3に、政治的安定・社会的安定だ。どんなに、うまみがあっても、治安が悪い、政情不安だ、投資したら、もってか

れたっていうのなら来ない。今のアフリカは、政治的安定・社会的安定が増してきた。

学生A： どの国が一番進出していますか？

タベタンド氏：中国だね。

学生A： そうですか？アメリカじゃないんですね。

タベタンド氏： そうだね。アフリカ大陸については、中国の進出がリードしてるよ。中国には、皆感謝しているよ。

学生C： 2010年代に世界第2位の経済大国になった中国の勢いはすごいですね。

タベタンド氏： 企業や商品だけがすごいんじゃないよ。中国の人がたくさん、アフリカに移り住んできているよ。

学生A： そうですか。驚きです。やはり、世界の現地のことは、普通のテレビやニュースなんかで接しているだけでは、わかりませんね。

タベタンド氏： そう思います。私も日本のことは90%以上、こちらに来て本当のことがよく分かった。＜笑い＞

学生A： やはり、世界の現地に直接行ったり、あるいはその国の関係の人に、直接聞くことが一番有効ですね。そうやって、相互理解が進むんですね。今日はありがとうございました。

タベタンド氏： こちらこそありがとうございました。また、お会いしましょう。

カメルーンからの留学生 Rayner Tabetando 氏



2. 4 コミュニティリーダーズネットワーク (CLN) 代表大出恭子氏を招待

コミュニティリーダーズネットワーク (CLN) 代表大出恭子氏をゼミに招待し、意見交換を行った。

ゼミ長： ようこそ、来て下さいました。よろしくお願いします。

大出氏： こちらこそ、よろしくお願いします。

ゼミ長： 大出さんは、大学で国際関係論を学ばれました。

大出氏： そうですね。世界に興味があったし、ずっとその分野で学び、仕事も国際的なことがしたいと、考えてきました。

学生A： 国際関係論ってどんな学問ですか？

大出氏： 世界各国の政治経済文化レベルでのつながりや変化を学びました。

学生B： 大学卒業後は、国際大学のスタッフとして働かれたんですね。

大出氏： そうです。世界中からの留学生のサポートをして、充実した仕事でした。

学生A： その後は、フランスに留学しましね。フランス留学では、フランスのことで、どんなことが、印象的でしたか？

大出氏： フランスというのは、自由の国なんですけど。

副ゼミ長： アメリカに自由の女神を送ったのも、フランスですね。アメリカとフランスは、自由の国ですね。

大出氏： フランスの自由は、アメリカの自由とはちょっと違うんです。

学生A： どういうことですか？

大出氏： つまり、自由を背景に自分を徹底して『個性化』することに、焦点があるんですね。フランス人って、自由だけど、その自由を使って、自分を、他人と違い、個性的な存在にする、自分なりの、自分にしかない個性的な服、個性的な感性、個性的な人間関係、個性的な哲学、個性的な家、個性的な行動方法、個性的な日常生活、個性的な食事、個性的な生き方と人生みたいに。

学生A： すごいですね。

大出氏： この自由と個性という価値観は、一番フランス人から、学びましたね。

学生A： だから、大出さんの行動や生き方は、個性的で、魅了されるんですね。

大出氏： ありがとうございます。人生は、皆、自分のものです。皆さんも、一定の、教育を受けたら、あとは、自由に個性的に生きて下さい。世間体や見栄や体裁や周囲を気にせずに生きると、後悔がありません。その代わりに、自分の人生は自分の責任です。

学生A： 分かりました。インパクトがある指導です。〈笑い〉

学生B： それから、日米コミュニティ・エクスチェンジ東京で働かれたんですね。

大出氏： 日米のNPOのかけ橋をつくる仕事でした。

学生A： ところで、最近、インドに行かれたそうですね。

大出氏： ハイ。新潟の片桐夫妻が、インドのビシャカパトナムという所で、学校をつかったので、その活動を応援しています。

学生A： どんな様子ですか。

大出氏： とにかくインドは、現在、グローバル化の波に乗って、急速に発展しています。それでも、人口が12億人以上で、まだまだ大変な深刻な状況は続いています。仕事のない人もたくさんいる。孤児もたくさんいる。家のない子供もいる。インドに行って、生きていくだけでありがたいと思いました。たまたま日本に生まれたから、こうして不自由なく生活できて、運がよかったってね。片桐さんは、インドの子供たちのために、財産をなげうって、学校をつくった。老後のための財産です。悠悠自適な老後の生活ができる身分なのに、インドで、家がない、親がいない、学校にいけないみたいな子供が、こんなにたくさんいるのかって、泣いて、それで未来のために、学校をつくるって決意して、つくったんです。私も、その話を聞いて、応援しようと思いました。

学生B： 今、学校はどうですか？

大出氏： ようやく、軌道に乗って、人材が出始めています。片桐夫妻も70代なんですが、この自分たちがつくった学校を卒業した子どもたちが、インドや世界をよくしていくことを、夢見ています。

学生B： 教育が大切なんですね。

大出氏： そう思います。学校をつくるって、未来を創ることなんですね。

ゼミ長： 大出さんはどんどん自分から、チャレンジして、たくさん体験して行って、そこで実感されたことをベースに考えられ、視野が広く、勉強になりました。体験・実感の大切さを学びました。本日は、ありがとうございました。

大出氏： こちらこそありがとうございます。またお会いしましょう。



2. 5 フェアトレードショップ「ら・なぷう」オーナー若井由佳子氏を招待

フェアトレードショップ「ら・なぷう」オーナー若井由佳子氏をゼミに招待し、意見交換を行った。

ゼミ長： ご多忙な中、来て下さいまして、ありがとうございます。よろしくお願ひします。

若井氏： こちらこそ、フェアトレードについて、知って頂く機会をつくって下さり、ありがとうございます。

ゼミ長： フェアトレードというのは、どんな取組ですか？

若井氏： 発展途上国の人と仲よくなるビジネスです。わかちあいのビジネスなんです。

学生A： 具体的には、どんなビジネスですか？

若井氏： 例えば、最近も、フィリピンに行って、服・小物・雑貨なんかを、たくさん買ってきたんです。つまり、自分で、輸入してきたんですが。問題は、フィリピンの現地に行って、その人から、買う時の商品の価格なんです。基本は、現地の人になるべく生活が向上するような価格で買うということです。

学生B： 製造原価とか、計算しないんですか？

若井氏： 製造原価は、もちろん頭に入れますが、要するに、安く買ったたかないってことです。

学生B： その価格で仕入れた商品を、日本のご自身のお店で、販売するんですね。

若井氏： そうです。とうぜん、経営が成り立つように、日本で売る場合も、適切な利幅を乗せて販売します。

学生C： つまり、発展途上国の人も利益を受けるし、若井さんも利益を得る、日本の消費者もそんな高いものじゃないエキゾチックな商品を手に入れて満足するという、皆がハッピーになるビジネス、フェア（公正）な貿易なんですね。

若井氏： その通りです。先進国の多くの方は、ショッピングをすることで、発展途上国の人を、応援することになります。貿易・ショッピングで世界に貢献するのが、フェアトレードの目的なんです。

副ゼミ長： ちょっと、冷静に考えたいんですが、グローバリゼーションは、元来、自由貿易を促進しているし、世界中の商品は、どんどん流通している気がするんですが・・・

若井氏： その通りです。グローバリゼーションによって、世界中の市場で、世界中の商品が回転しているのは事実です。そのこと自体は止められない流れになっていると思います。

副ゼミ長： でも何か、課題があるんですね？

若井氏： 発展途上国に行ってみて、分かったことがあるんです。それは、世界レベルでの激しい自由市場の競争経済の展開では、発展途上国の生産現場で、生産する人達がつくる商品の価格を極端に低くして、買ったたく現実があり、その働く人にしてみれば、こんなに安く買ったたかれては、利益が極小で生活は、よくなっていかないという現状です。それは、立場の弱い人を苦しめるアンフ

フェアな取引なんです。だから、フェアトレードは、コスト・利益を考えないというわけではないが、適切に現地の人々が利益が出て、生活がよくなるように買って来て、豊かな先進国の人にその価格をベースに買ってもらうということなんです。

学生 A : 先進国の豊かな人からすれば、ちょっとしたエキゾチックな服やカバンの商品価格が、50 円や 100 円高くても、気にはならないでしょう。

若井氏 : そうなんです。私なんか、フェアトレードで、仕入れる現地の商品は、日本の他の、大量販売している店なんかではない、オンリーワンの商品なんです。つまり、グローバル化が発展しても、発展途上国の現地の商品で、先進国の企業なんか、仕入れるものは、ほんの一部なんです。現地に行けば、こんなものもあった、あんなおもしろいものがあったとか、驚くような、個性的な、文化的背景の違いから生産されるような、ユニークな商品がたくさんあるんです。それらをうまく買って来て日本で売るから、消費者にも珍しいので喜ばれる。

ゼミ長 : いろいろ考えさせられました。若井さんのすごいところは、直接、発展途上国の現地に飛び込み、その現状を知り、自分に何かできないかっていう、気持ちから、行動を起こされたことですね。若井さんにとっては、フェアトレードによる国際的応援が『使命』なんですね。人間には皆『使命』がある。『使命』とは、自分でつくるものだと思います。使命を自覚した時人間は偉大になるしその能力を伸ばすんですね。今日はありがとうございました。フェアトレードのお店に行ってみます。

若井氏 : こちらこそ、ありがとうございました。ぜひ、お店に来て下さい。

フェアトレードショップ「ら・なぶう」 若井 由佳子 氏



「ら・なぷう」の商品

衣類・雑貨・食べ物等のフェアトレード商品を取り寄せ販売。チョコレート・カレー等が人気があり好評。



—住所—
新潟県長岡市
東坂之上町3丁目
1-10



3. Visit

3. 1 長岡まつり前夜祭大民謡流しへの参加

8月1日の長岡まつり前夜祭の「大民謡流し」に、長岡に住む世界からの外国籍市民の方と一緒に参加した。

民謡流しの踊りの練習は7月頃から行った。3種類の踊りを覚えるのに苦勞する場面もあったが、皆一生懸命、踊りを覚えようとしていて感動した。

練習の時間を通じて、さまざまな外国籍市民の方と交流し、世界の様子を聞くことができた。外国籍市民の方の多くは、毎年の民謡流しに参加することを、楽しみにしていた。

当日は、世界のいたる所から長岡にやってきた方、その中には大人から、子供・お年寄りまで、いろいろな世代の人がいたのですが、皆で、最後まで、踊りを成し遂げて行く中で、心の底から、「国籍や民族の違いなんか全く関係ない。皆、幸せや友情を求める人間じゃないか」という気持ち」が、わき上がってきた。この込みあげる思いは、『心の中に確立した巨大な財産』となったと直感したし、これが『グローバルマインド』なのかと、実感した。

長岡まつり前夜祭 大民謡流しの様子



3. 2 外国籍市民の方が経営するお店を訪問

長岡市内には現在、外国からやってきて、母国の料理を提供するお店を開くケースが増えている。そのいくつかのお店を訪問した。

—長岡市中島・『大連飯店』—

大連からやってきた中国の方がきりもりしているお店で、どの料理も、味は抜群で、しかも、ボリュームがあり、若いお客さんも多く、周辺でも人気があるお店です。

大連飯店



どの料理もボリュームがあり、食べ応えのあるおいしいお店です。

場所

新潟県長岡市
中島5丁目2-1 2



—長岡市坂野上町・『韓国家庭料理サランバン』—

メニューも豊富で、本場韓国の焼肉料理は最高でした。お店の方がとても気さくな方で、雰囲気最高の心がなごむお店です。

韓国 家庭料理 サランバン

味がしっかりしていてメニューも豊富なお店です。
店長さんがとても気さくな方なので楽しい一時が過ごせます。



—住所—

新潟県長岡市
坂之上町2丁目4-6
西山ビル 1F



—長岡市坂野上町・『タイレストラン アノン』—

なかなか日本人の通常の生活では味わえないテイストの料理が、興味をそそりました。南アジアの雰囲気味わえて、よかったです。

タイ レストラン アノン

**本格的なタイ料理が味わえます！
興味のある方は是非、味わってみて
ください。**





—住所—
**新潟県長岡市
坂之上町1-5-5
さくら第一ビル 2F**

3. 3 外国籍市民の方が集まる教会を訪問

長岡にはキリスト教の教会が多く、それらの教会の中には外国からの方が多数集まっている所もありました。長岡市学校町の教会を訪問し世界からやってきた方と交流しました。

学生B： こんにちは、皆さんは、どちらの国からこられたんですか？

ブラジルの方： 私はブラジルです。

韓国の方： 私は韓国です。今は栃尾に住んでいますよ。

中国の方： 私は中国です。日本の大学院まで勉強して、今は日本で就職しました。

学生B： そうですか。皆さんは、クリスチャンで、毎週、この教会に来るんですか？

一同： そうです。皆、クリスチャンです。毎週皆に会えて、楽しいですよ。

学生B： ブラジルのリオデジャネイロは、次のオリンピックの開催地ですね。楽しみですね。ブラジルのリオデジャネイロが、世界中から注目されますよ。いよいよ、ブラジルの時代ですね。リオデジャネイロは世界の美港の一つで有名です。コパカバーナビーチやコルコバードの丘は、映画にもよく出てきますね。

ブラジルの方： よく知ってますね。ブラジルのことを知っていてくれてうれしいです。ありがとうございます。

学生B： ブラジルでは、キリスト教への信仰があついですか？

- ブラジルの方：そうですね。信仰心は皆、あると思います。皆、日本に来て、地域の教会なんかに出かけていきますよ。
- 学生B：韓国も、キリスト教の教会が多く、クリスチャンが多いと、聞きますが？
- 韓国の方：そうです。クリスチャンは多いですね。
- 学生B：中国でもクリスチャンの方は多いんですか？
- 中国の方：よくそういわれるんですよ。中国は、1949年の中華人民共和国の建国以来、社会主義体制だから、宗教はどうなっているのかという疑問ですよ。
- 学生B：そう思ってきましたが、違いますか？
- 中国の方：それは、いろいろ歴史があって、宗教が重視されるほどでもない、雰囲気のある時代もあったと思いますが、民衆一人一人の心まで、完璧に、国家体制の方向がそうだからって、そうなるわけでもないんですよ。実際は、おそらく、キリスト教なんかの宗教への信仰は、消えずに受け継がれてたようですよ。現在の中国社会は、かなり自由な雰囲気になってきて、キリスト教徒は多いです。
- 学生B：なるほど、ハイレベルな宗教は、生命力が強いんですね。
- 韓国の方：そう思います。どんなに時代が変化しても、動乱で混乱した、逆に豊かになって安定した、生活に困らないといっても、人間の個人ベースを考えてみて下さい。人間関係・自分の理想と現実・家族内のこと・将来・退屈だ・病気になった・仕事をどうする・組織をどうする・年をとって死をどう考えるか・・・悩みというか課題なんかいくらでもあるにきまつてる。
- 中国の方：分かります。昔、中国は貧しかった。その時も悩みはあった。今の中国は、世界第2位の経済大国。でも、豊かになってきて、たくさん悩みはある。これからも、同じです。
- 学生B：考えさせられますね。日本だって、これだけ、一応の豊かさのベースがあっても、ストレスだ、若者のニートだパラサイトだ、リストラだ、ヘイトクライムだなんて、ものすごい世の中というか・・・精神状態ですよ。
- ブラジルの方：そうですよ。日本は豊かで平和で最高の国なのに、何か、多くの人は、幸福に思っていないみたいに感じて。＜笑い＞どうしたのかなって。
- 学生B：やはり、精神的な安心感・充実感が必要で、それは必ずしも、経済的・政治的安定や発展のみで、実現できるものではなく、個人ベースの問題でもあるが、宗教の役割があるということですね。
- 韓国の方：そう思います。この教会には、世界のいろいろな国からの人が来ます。安心感・充実感を与えているんだと思います。「誰がきてもいいよ。あたたかく歓迎するよ。いつ来てもいいんだよ。君に何があってもいいんだよ。聞かれないことは聞かないから安心して。何でも聞いてあげるよ。いつでも応援してあげるよ。こちらから見返りやリアクションなんか求めないから心配しないで。本当の愛ってそういうものでしょ。」こんな雰囲気があるから、人は安心感・充実感を感じてくれるんです。
- 学生B：かなり、考えさせられます。経済・政治・経営・組織といったレベルでは、解決・対応できない人間の心のレベルの話なんですよ。そんな視点から、

グローバリゼーションも考えないといけないんですね。

ブラジルの方：そう思いますよ。実際、宗教のウエイトは、グローバリゼーションを、考える上で、重要なテーマです。宗教間の相互理解の不十分さから、対立もあるけど、むしろ、普遍的な愛・慈悲・喜捨みたいな、人間として偉大な心のあり方、振る舞いを教えるのが、ハイレベルな宗教で、仮に、それが、組織化するにしても、連携化するにしても、世界への影響力の可能性は、大きいと思います。

学生B：そうですね。現実には、キリスト教の細かい派や組織なんかは、無数にあるんでしょうけど、ローマ教皇の主張は、国際政治を変えるほどに、世界のキリスト教全体への、影響力があって、時代を動かす場合がある。1980年代のヨハネ＝パウロⅡ世が、ソ連支配下のポーランドにおける自由化・民主化を求めた「連帯」のキリスト教徒を応援する流れが、世界のキリスト教徒にも伝わってポーランドの民衆を何とかしたい、ソ連や社会主義共同体の権力は何をやっているんだみたいな、国際世論をつくった。その辺が、冷戦崩壊への遠因になったという分析もあります。今日はありがとうございました。とても有意義な交流ができました。

韓国の方：また、何回でも来て下さい。ここは誰でもいつでも歓迎される場所ですよ。

学生B：感動しました。『誰でもいつでも歓迎される』から世界からここに集まるんですね。この雰囲気をつくるのが地域で必要だと、皆に伝えます。

3. 4 外国人技能実習生の会合を訪問

現在の日本には、外国から地域に来て働きながら技能を取得している外国人技能実習生がたくさんいる。外国人技能実習生の制度は1980年代頃から制度整備が始まった。即ち、その頃から海外進出した日本企業が現地法人から現地社員を招聘し、技術や知識を習得した現地社員が、帰国後、その技術を母国で発揮させたことから国際貢献・国際協力の視点から1981年に在留資格が創設されたのであった。外国人技能実習生制度の推進団体である財団法人国際研修協力機構（JITCO）が、技能実習生の受入れを行おうとする、あるいは行っている民間団体・企業等や諸外国の送出し機関・派遣企業に対し、総合的な支援・援助や適正実施の助言・指導を実施することになった。技能実習生に対し、その悩みや相談に応えるとともに入管法令・労働法令等の法的権利を保障し、技能実習の成果向上、技能実習生の受け入れ機関と送り出し機関等への支援も展開するようになった。1993年に「学ぶ活動」である研修に加えて、「労働者として」実践的な技能・技術を修得するための技能実習制度が導入されたのであった。2010年には出入国管理及び難民認定法が改正され、生産活動などの実務が伴う技能習得活動は技能実習制度に一本化された。ただし、在留資格としての「研修」は廃止されず、座学など実務が伴わない形での技能習得のみが認められる資格として存続する。

長岡周辺にも、中国・ブラジル・フィリピン・ベトナム等から、外国人研修生が大勢きている。私達は鋳物の工場に研修にきている中国からの研修生の会合に参加し交流しました。

学生B：中国から日本に来て、何年になりますか？

実習生：1年くらいです。

学生B：日本での生活は慣れましたか？

実習生：慣れました。

学生C：日本のこの地域で、生活してみて、どうですか？

実習生：とっても生活しやすい、いい所です。

学生C：どんなところが、いいですか？

実習生：街がきれいなこと。安心して、買い物とか、生活できます。

それから人々が、礼儀正しいし、親切です。

学生B：街がきれい、安心感のある雰囲気、礼儀正しい、親切は、外国から来た人から、よくいわれる、日本の美点で、そのことは、日本人自身が、もっとよく認識して、守っていかなければいけないと、思います。

母国にはよく連絡していますか。

実習生：毎週、母国の家族や友人と話しています。今は電話でもメールでも簡単に交信できるので、お互い離れている気もしないんです。

学生C：なるほど。母国には定期的に帰国できますか。

実習生：希望すれば帰国できます。

学生C：どれくらいの時間で帰国できますか。

実習生：そうですね。1日あれば帰れますよ。

学生B：近いですね。もう一国の中でどこかに移動して働きに行くのと、海外に移動して働きに行くのは同じくらいの感覚になっていくんですね。

中越鋳物協同組合事務局長の加藤正樹氏に話を伺いました。

学生B：加藤様は中越鋳物協同組合で長きに渡り、外国人研修生の対応に関わっておられました。この制度についてどう思いますか。

加藤氏：重要な制度だと思います。実際、日本の製造業の製造現場をみて下さい。日本人でそこで働いてくれて募集したって、人が集まらないんですよ。集まらないなら、工場が動かないでしょ。だから外国から日本の技能も覚えてもらう目的で、働きにきてもらう。これが、外国人技能実習生の制度です。

学生B：どこの国から、働きに来てくれますか？

加藤氏：日本では、中国・ベトナム・ブラジル・フィリピンなんかから、来てますよ。鋳物関係では、中国からが主流です。

学生B：具体的に、どうやって、受け入れるんですか？

加藤氏：中国に行って、向こうから送ってくれるまとめ役をやっている組織と連携して、面接に行きます。そこで面接させてもらって、来てもらう。こちらに来てもらってからは、何回も研修を行って、生活の仕方、住居、仕事の進め方、交通ルール、マナー、メンタル面での対応、健康管理なんか、研修生が無事故でよく学び働けるようになり手厚く応援します。

学生 B : 何年、日本で働けるんですか？

加藤氏 : 3 年間です。

学生 B : もっと長くは、いられないんですか？長くいてくれば、仕事も熟練するし、生活も慣れてくる。実習生だって、住民税・所得税・消費税を払ってるんですよ。給料の一部を本国に送金する。母国の人だって、豊かになる。帰国するとかいっても、飛行機で、簡単に帰れるわけですよ。数時間もあれば。その日のうちに、中国なんかだった帰れるわけですよ。日本の地域は、深刻な人口減少で、パワーダウンですよ。外国人実習生に長くいてもらえばいいじゃないですか。

加藤氏 : そう興奮しないでください。＜笑い＞若いから、純粹で、正義感というか使命感が強いんだね。若さの特権だね。＜笑い＞結局は、ビザ制度の問題なんです。国家にはビザ制度があって、地域レベルでは、どうすることもできない。

学生 C : ビザ制度の問題ですよ。

加藤氏 : そうです。日本は、世界第 3 位の経済大国。世界、特に近隣のアジア諸国からすれば、憧れの国なんです。皆、入ってきたいに決まってる。日本の地域は、人口減少だ。深刻だ。このままじゃ、誰が、税金払って、年金保険料はらうんだって問題でしょう。だったら、世界から入りたい、そこで働きたいっていうんだから、入れればいいじゃないかでしょ。でも、国家のビザ制度の問題があるんだ。

学生 B : ビザとは何かと考えれば、ビザ（査証）とは、国が自国民以外に対してその人物が入国しても差し支えないと示す証書です。現在では、グローバル化の中で、一定の条件内で査証免除が行われている場合が増えている。例えば、EU（欧州連合）では、加盟国内の国民（未加盟のスイス・ノルウェーも含む）が行き来するときは、ビザ申請をせずに別の EU（欧州連合）加盟国に居住ができ、就労することも可能である査証免除が存在している。日本においても、短期滞在（90 日以内の観光・商用・知人親族への訪問等・報酬を得る活動しない場合に限られる。）については、66 カ国に対して、査証免除にしている。その国とは以下である。地域別に見ていくとアジアでは、シンガポール・マカオ・マレーシア・大韓民国・台湾・香港・タイ（15 日以内）・ブルネイ（15 日以内）の 8 ヶ国である。北米は、アメリカ・カナダの 2 ヶ国。中南米では、アルゼンチン・チリ・ウルグアイ・エルサルバドル・グアテマラ・コスタリカ・スリナム・ドミニカ共和国・バハマ・バルバドス・ホンジュラス・メキシコの 12 ヶ国。大洋州は、オーストラリア・ニュージーランドの 2 ヶ国であり、中東では、イスラエル・トルコの 2 ヶ国。アフリカは、チュニジア・モーリシャス・レント 3 ヶ国。欧州では、アイスランド・アイルランド・アンドラ・イタリア・エストニア・オーストリア・オランダ・キプロス・ギリシャ・クロアチア・サンマリノ・スイス・スウェーデン・スペイン・スロバキア・スロベニア・セルビア・チェコ・デンマーク・ドイツ・ノルウェー・ハンガリー・フィンランド・フランス・ブルガリア・ベルギー・ポーランド・ポルトガル・マケドニア旧ユーゴスラビア・マルタ・モナコ・ラトビア・リトアニア・リヒテンシュタイン・ルーマニア・ルクセンブルク・イギリスの 39 ヶ国で半分以上の欧州の地域で査証免除が行われている。しかし、世界には、200 程の国が存在しているため、まだ、日本のビザ免除は遅れていると私は

感じます。

加藤氏：一番の課題は長期滞在ビザだね。

学生B：そうなんです。長期滞在ビザ制度は、日本の場合、①就業ビザ・②一般ビザ・③特定ビザ・④外交ビザ・⑤公用ビザ・⑥医療滞在ビザが存在する。長期滞在ビザの滞在期間は2年～3年又は5年まで。それぞれ細かく規定がある。就業ビザは、18の項目に分かれており、教授・芸術・宗教・報道・投資・経営・法律・会計業務・医療・研究・教育・技術・人文知識・国際業務・企業内転勤・興行・技能・高度人材などが存在する。一般ビザは、文化活動・留学・研修・家族滞在・技能実習生などが存在する。最後に特定ビザでは、日本人の配偶者等・永住者の配偶者・定住者・特定活動などが存在する。

加藤氏：かなり、複雑だね。

学生C：一般的に、日本への入国・滞在は、短期滞在ビザ・長期滞在ビザも、申請が大変なため、多くの外国人の方々から苦労していると口々にお話を伺う。ビザなんて制度は、本当に必要なものなのかと考えます。今でも明白な答えがでない状態ですが、これは、全世界の人々がしっかりと考える問題なのではないかと感じます。

学生B：最後に、ここにいる約60人ほどの実習生に、質問させて下さい。

加藤氏：どうぞ。

学生B：皆さんは、3年間ここで、働いて帰国しなければなりません。もし、日本の制度が、変化してずっと、この土地で、働けるようになったとしたら、ずっといたいという人は、手を挙げてみて下さい。

<実習生の40人程が手を挙げた>

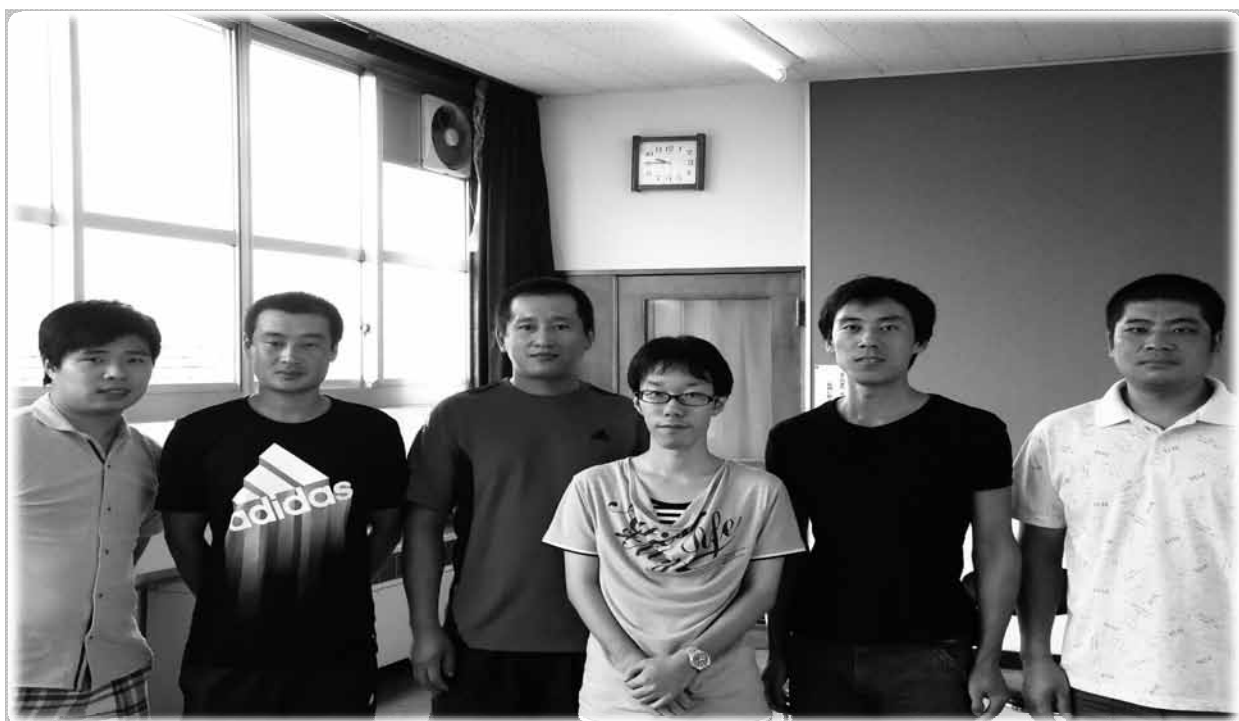
学生B：ほら。やっぱり。日本の地域に住み続けたいという人は多いんです。この一点は、日本の救いかもしれません。人口戦略は国家・地域の基盤です。このことについて、よく勉強してみます。

加藤氏：よろしくお祈りします。期待してますよ。

— 鑄物業界での外国人技能実習生の会合 —



— 外国人技能実習生と交流 —





4. Donate

10 月末の悠久祭において、世界の子供たちを応援する目的で、「ハイグレードバー」というお店を開いた。ハイグレードバーでは、少しでも世界の商品を知ってもらうことを考え、毎年、世界からの輸入品を使っている。

今年は、イギリスのスコットランドのスコッチ、エストニアのウォッカ、フィンランドのスパークリングワイン、スウェーデンのお菓子を出した。

それらを飲んで食べてくれたお客さんには、イギリス・エストニア・フィンランド・スウェーデンの国についても紹介し国際理解につとめた。

ハイグレードバーで得た収益金の全てを『ユニセフ』に寄附することにし、ホテルニューオータニ長岡がユニセフとの仲介を行っているので、昨年引き続き、ホテルニューオータニ長岡で寄附金贈呈を行った。

—ハイグレードバーで世界のお酒・お菓子を販売し収益金をユニセフに寄附—



おわりに

グラスルーツグローバル化の活動も、今年で5年目になるが、一年間、無我夢中で走ってきたというのが実感である。歴代の先輩から後輩に受け継がれてきた、「グラスルーツグローバル化」の具体的な活動、「Study・Invite・Visit・Donate」に沿って進めた。

Studyの活動では、大いにディスカッションすることで、自分たちの考えを洗練化することができた。歴代の先輩から受け継がれてきた学習資料もつかって、「グローバル化」の恩恵や問題点などを多角的に複数回に渡って議論した。その中で、グローバル化による恩恵・メリットと、文明間・国家間・民族間等での相互理解・総合調整の不十分さから生じる摩擦等の、デメリットを、冷静に認識した。そして、「ただ自分たちが知らないことから不安や敵愾心を起こし、摩擦・紛争に至るようなこと」は、あってはならないと思い、グローバル化を、平和的にランディングさせ世界の平和的統合を実現に寄与するために、世界各地で草の根・地域から世界の人々が出会い語り合い友情を築いていく「グラスルーツグローバル化」の意義を確認した。

Inviteでは、アメリカ人・バングラデシュ人・カメルーン人の方と交流する中で、それらの国や文明圏からの独自の考え方・価値観に触れることができ、とても刺激的だった。さらに、大出恭子氏・若井由佳子氏からは、そのダイナミックな国際的支援活動の体験談を伺い、一人の人間がここまで世界に関わり世界を応援できるのかと感動し、世界への貢献の姿勢、実際の活動方法を学び、「人間に不可能なし」という確信が湧いた。

Visitでは、歴代の先輩から受け継いできた、長岡まつり前夜祭の民謡流しへの外国籍

市民の方と参加するプロジェクトに参加した。また今年新しく、外国からやってきて母国の料理を出す店をやっている方への訪問・交流にも挑戦した。中国・韓国・タイから来られた方の料理店で料理を味わう中で、世界にはその出身国の人しかつくれない味があることを発見した。キリスト教の教会への訪問とそこでの外国の方との交流も印象的だった。ハイレベルは宗教は元来ボーダーレスで世界を平和的に統合する上で寄与する影響力ないし使命があることを直感した。さらに、外国人技能実習生の会合への参加は一番衝撃だった。なぜなら、数が多いことが分かったからである。日本には留学生等も多いが、実習生という形で来ている人が多いことに驚いた。日本が憧れの地で日本に働きたい住みたい日本から送金して母国の家族を豊かにしたいという人達の思いを知った。そして、国家レベルでの、ビザ制度が、大規模な自由な人間の移動を牽制している事実を知った。

Donate では、10月の悠久祭で、恒例の『ハイグレードバー』を出店し、世界からの輸入品を紹介し、そこで得た利益は、世界の子供たちを支援するため、ユニセフに寄附した。現在でも、世界人口の約70%は年収30万円以下で生活し、毎月2万円前後で生きざるをえない。いまだに学校教育を受けることができない子供やただ生存するだけに必死にならざるをえない状況にいる人たちがあまりに多い。ユニセフの仲介をしているホテルニューオータニ長岡で今年も寄附金を贈呈したが、ホテルニューオータニ長岡のスタッフの方にも私達の活動が理解して頂けるようになったとも感じた。「長岡大学の学生さんが毎年10月にユニセフに寄附しに来てくれる。立派な若者達だ」との印象を持って頂いているのではないかと実感した。この寄附運動は、終わってみると何か強烈に充実感を感じるというのが、皆の共通した実感であった。人間は、自分の人生で成長・成功・勝利を目指して奮闘する中で、人間的に大きくなる面もあるが、見返りやリアクションを求めず人に尽くす慈悲・愛の振舞に、人間としての内奥からの輝きがでることを、体得したのだと思う。

総じて、「グラスルーツグローバリゼーション」の活動を通じて、私達は自然に、「国籍、民族等の相違はもう関係ない。皆、幸せと友情を求める同じ人間である」という「グローバルマインド」を体得したと考える。

私たちが実践しているような人間性豊かな地域の国際交流が、世界各地で拡大して行くことこそが、グローバリゼーションを平和的にランディングさせ行く底流となることを確信する。最後に私達は、今年度の活動の締めくくりとして、次のメッセージを残しておきたい。

人間はみな、宇宙という大自然の恩恵によって生まれる平等な尊い存在であり、人類は一つである。

宇宙的スケールのヒューマニズムから、私たちは、この地域に全世界から人が幸福とチャンス求めて、来てくれることを歓迎する。

私達は、グラスルーツグローバリゼーションの運動を続け、この地域にあっては、世界のどこから来ても歓迎され応援されるような、地域風土の構築に、貢献して参りたいと決意している。

謝辞

私達の「グラスルーツグローバリゼーション」の活動に、貴重なお時間と労力を割いてご協力して下さった多数の方に感謝申し上げたい。

Invite の活動においては、バングラデシュ人留学生ナスラット氏、カメルーン人留学生タベタンド氏・フェアトレードショップ「ら・なぷう」オーナー若井由佳子にお世話になった。

Visit の活動では、長岡まつり前夜祭大民謡流しに参加した際、長岡市国際交流センターのスタッフの方から激励をいただいた。大連飯店・サランバン・アノンのスタッフの方には、おいしい料理を食べさせて頂いた。長岡市学校町のキリスト教の教会のスタッフの方にもお世話になった。外国人技能実習生の会合では、中国からの多くの実習生に話を聞かせて頂いた。また、中越鋳物工業協同組合事務局長の加藤正樹氏には、学ぶことが多かった。

ユニセフの募金の仲介では、ホテルニューオータニ長岡のスタッフの方にもお世話になった。

私たちの地域活性化プログラムのアドバイザーになって頂いた、アメリカ人 IT コンサルタントのデビッド＝ブズロー氏、CLN 代表の大出恭子氏からは、一年を通じて常に貴重なご指導を頂いた。お世話になった全ての方に心より感謝申し上げたいと思います。

ありがとうございました。

サンキュー・シェシェ・カムサハムニダ・メルシー・ダンケ・スパシーバ・カリマカシ